

602.16-Ko13ウ



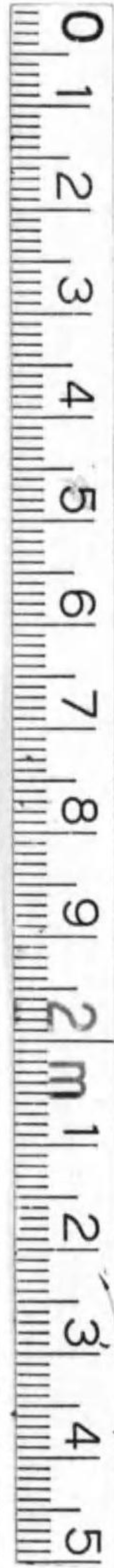
1200500747850

2216
13

神戸市調査
資料第一輯

神戸市の産業活動と港都の建設

神戸市調査室編



始



調査資料第一輯

神戸市の産業活動と港都の建設

神戸市調査室

602.16
K0.13

は し が き

發行所寄贈本

一、本稿は、神戸市の産業が今日如何に活動しつゝあるかを概説したものである。

「大港都の建設」と言ふことが、一つには国土の高度國防體制への要請と、二つには大東亞戦の赫赫たる戦果に應へて、今日朝野の關心を聚めつゝあることは周知の通りである。

併し吾々が、此の様な事柄を按ずるには、先づ神戸市とは如何なるものか、そしてそれが今日如何に躍動しつゝあるか、を明かにして置かねばならぬ。此の意味に於て本稿が、港都の經濟的機能とその構造を知る上に一つのよすがともならば倅である。

二、本調査は當室員、是常福治、之を擔當した。

昭和十七年十月二十九日

神戸市調査室



目次

神戸市……………(二)

第一工業……………(四)

一 工産額……………(四)

二 工場……………(一〇)

三 職工……………(二三)

四 原動機及動力……………(二四)

五 神戸市工業の沿革……………(二六)

六 最近の趨勢……………(三〇)

第二貿易……………(三四)

一 神戸港の生ひ立ち……………(三四)

二 貿易額……………(三五)

イ、何を如何程輸出してゐるか……………(三四)

ロ、何を如何程輸入してゐるか……………(三五)

ハ、何處へ輸出し何處から輸入してゐるか……………(四〇)

第三交通……………(四三)

一 海運……………(四三)

二 陸運……………(四四)

結語……………(四六)

挿入統計表目次

第一表 六大都市の面積と人口……………(二)

第二表 神戸市工業一覽……………(三)

第三表 六大都市工産額比較……………(七)

第四表 規模別工場數及生産額……………(九)

第五表 五大工業都市工産額累年表……………(一九)

第六表 神戸港外國貿易の趨勢……………(二三)

第七表 三港貿易額累年表……………(二五)

第八表 三港輸出額累年表……………(二七)

第九表 三港輸入額累年表……………(二九)
 挿入統計圖表目次

第一圖 六大都市の人口密度……………(一)
 第二圖 神戸市の工産額(事業別)……………(三)
 第三圖 六大都市の工産額……………(四)
 第四圖 神戸市の主要工業……………(五)
 第五圖 六大都市の重工業……………(六)
 第六圖 六大都市の工産額(事業別)……………(七)
 第七圖 規模別工場数と生産額……………(九)
 第八圖 規模別工産額(事業別)……………(一二)
 第九圖 神戸市の職工数……………(一三)
 第一〇圖 五大工業都市工産額趨勢……………(一五)
 第一一圖 神戸市工業の趨勢……………(一六)
 第一二圖 縣市工産額趨勢……………(一七)
 第一三圖 神戸港外國貿易の趨勢……………(一八)
 第一四圖 三港貿易額の趨勢……………(一九)
 第一五圖 日本貿易に於ける三港地位の變遷
 (輸出入額)……………(二〇)
 第一六圖 三港輸出額趨勢……………(二一)

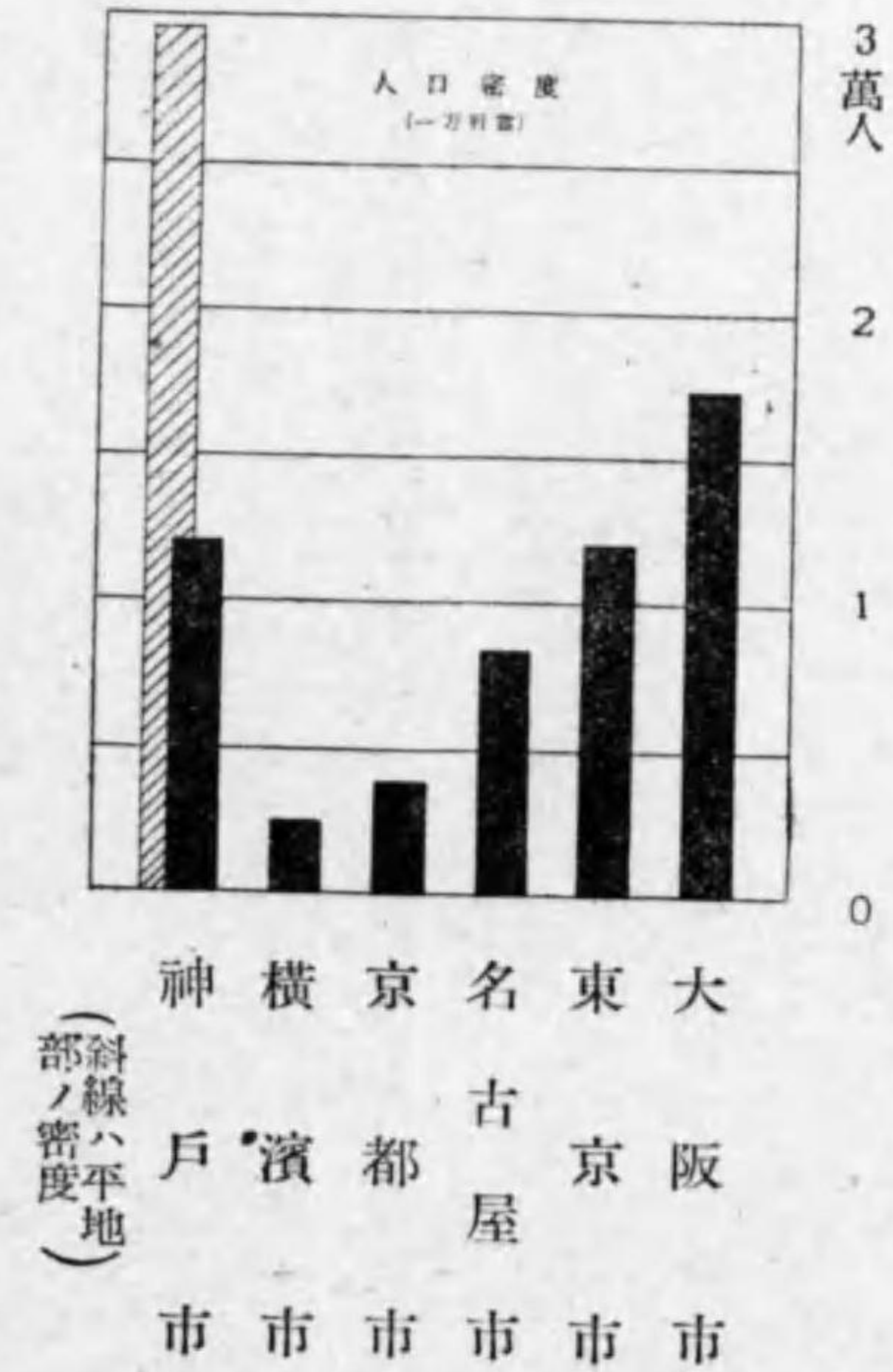
第一七圖 日本貿易に於ける三港地位の變遷
 (輸出)……………(二二)
 第一八圖 三港輸入額趨勢……………(二三)
 第一九圖 日本貿易に於ける三港地位の變遷
 (輸入)……………(二四)
 第二〇圖 本邦貿易と三港……………(二五)
 第二一圖 三港の輸出入數量……………(二六)
 第二二圖 神戸港の主要輸出品……………(二七)
 第二三圖 横濱港及大阪港の各輸出品……………(二八)
 第二四圖 本邦主要輸出品と三港……………(二九)
 第二五圖 神戸港の主要輸入品……………(三〇)
 第二六圖 横濱港及大阪港の各輸入品……………(三一)
 第二七圖 本邦主要輸入品と三港……………(三二)
 第二八圖 神戸港の地域別輸出入額……………(三三)
 第二九圖 大阪港の地域別輸出入額……………(三四)
 第三〇圖 大東亞貿易と阪神港……………(三五)
 第三一圖 神戸市の入出貨量……………(三六)
 第三二圖 阪神入出貨量海陸構成比較……………(三七)

神戸市の産業活動と港都の建設

第一表 六大都市の面積と人口
(昭和15年國勢調査)

都 市 別	面 積	人 口	密度(一方軒當)
東 京 市	57.231 ^{平方軒}	6,778,804 ^人	11,834 ^人
大 阪 市	18.745	3,252,340	17,350
名 古 屋 市	15.879	1,323,084	8,364
京 都 市	23.865	1,039,726	3,775
横 濱 市	40.325	963,091	2,414
神 戸 市	8.306	967,234	11,533

第一圖



神 戸 市

茅渚の海の西北岸、急峻な六甲山系の海に臨んだ斜面の上に、細長く延びた神戸の街は、他の五大都市が、夫々大平原の廣表に建てられたのは著しい對照をなしてゐる。従つて市域八十三平方軒の中、六割は山地で、平地は僅かに三十四平方軒に過ぎない。此の狭い地域に、九十六萬の人口を擁して、其の平地密度一平方軒二八、四五九人と云ふ脅威的數字を示してゐる。尤も昭和十六年七月には、西隣垂水町を併せて三十二平方軒を加へ、平地面積も約五一平方軒となつたが、猶密度一九、五九五人の我が國最高記録を失はない。

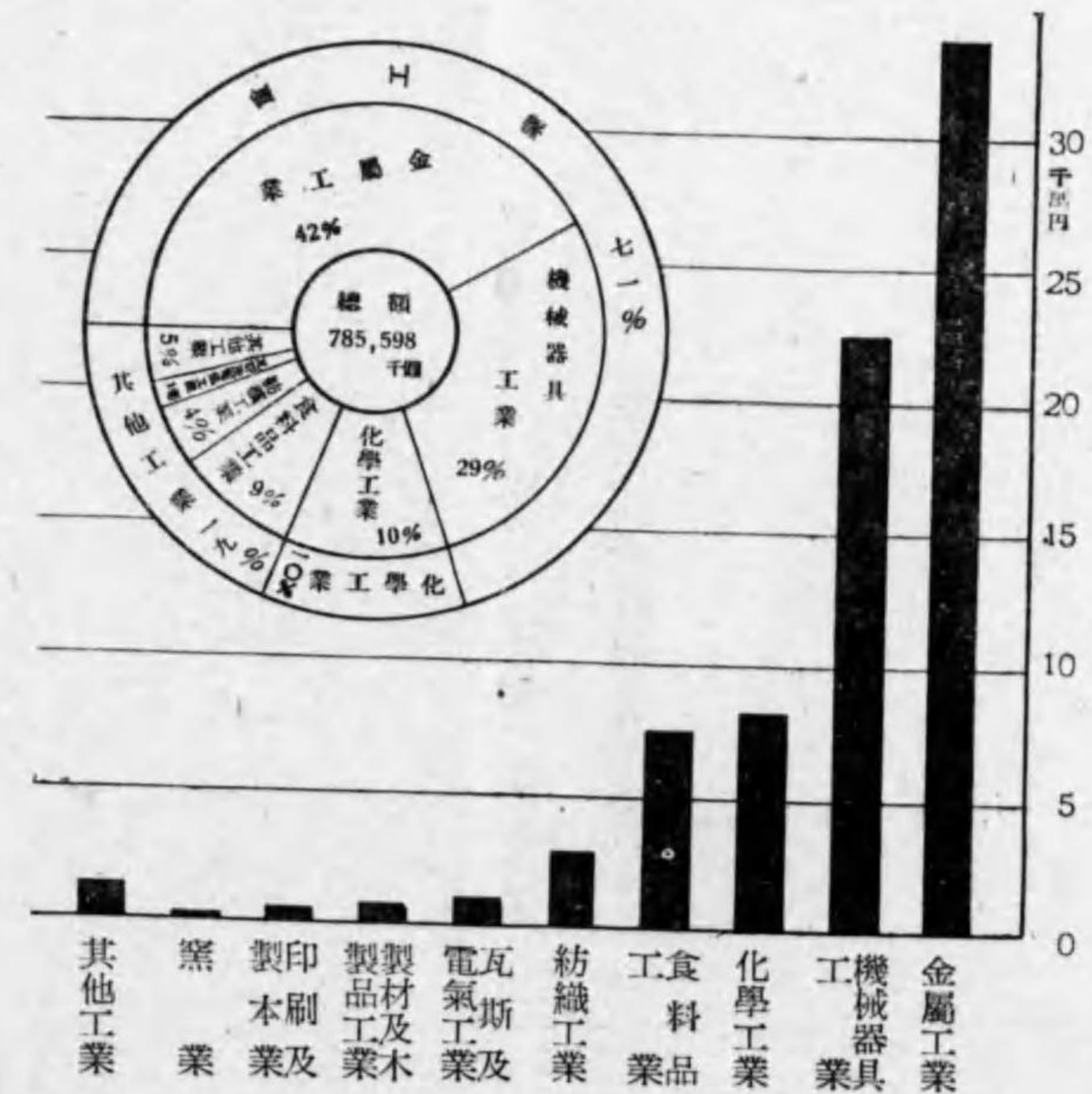
此の狭い地域に、此の大人口を抱擁して、そこに東亞の神戸を築き上げたものは、言ふまでもなく、天然に恵まれた良港と、そして港が育て上げたその工業である。まことに此の地にして此の港がなかつたならば七十年前の一漁村は、せいせい風光明眉の一景勝地以上には出でなかつたであらう。

では此の様にして、港に培はれた神戸市の工業は、今日ごの様な姿を示してゐるか、又此の工業と共にその港は今日ごの様な活動を續けてゐるか、許された數字の範圍に於て産業神戸を一瞥して見よう。

第二表 神戸市工業一覽 (昭和13年末)

事業別	工場數	職工數	生産額	同比率
紡織工業	130	7,044	26,957	3.4%
金屬工業	280	12,592	333,097	42.4
機械器具工業	597	46,577	224,226	28.5
窯業	15	426	979	0.1
化學工業	195	6,851	82,046	10.4
製材及木製品工業	283	1,499	7,515	1.0
印刷及製本業	98	1,319	4,342	0.6
食料品工業	255	3,368	73,466	9.4
瓦斯及電氣業	4	233	8,555	1.1
其他工業	263	6,537	24,414	3.1
合計	2,120	86,464	785,599	100.0

第二圖 神戸市の工産額 (事業別)



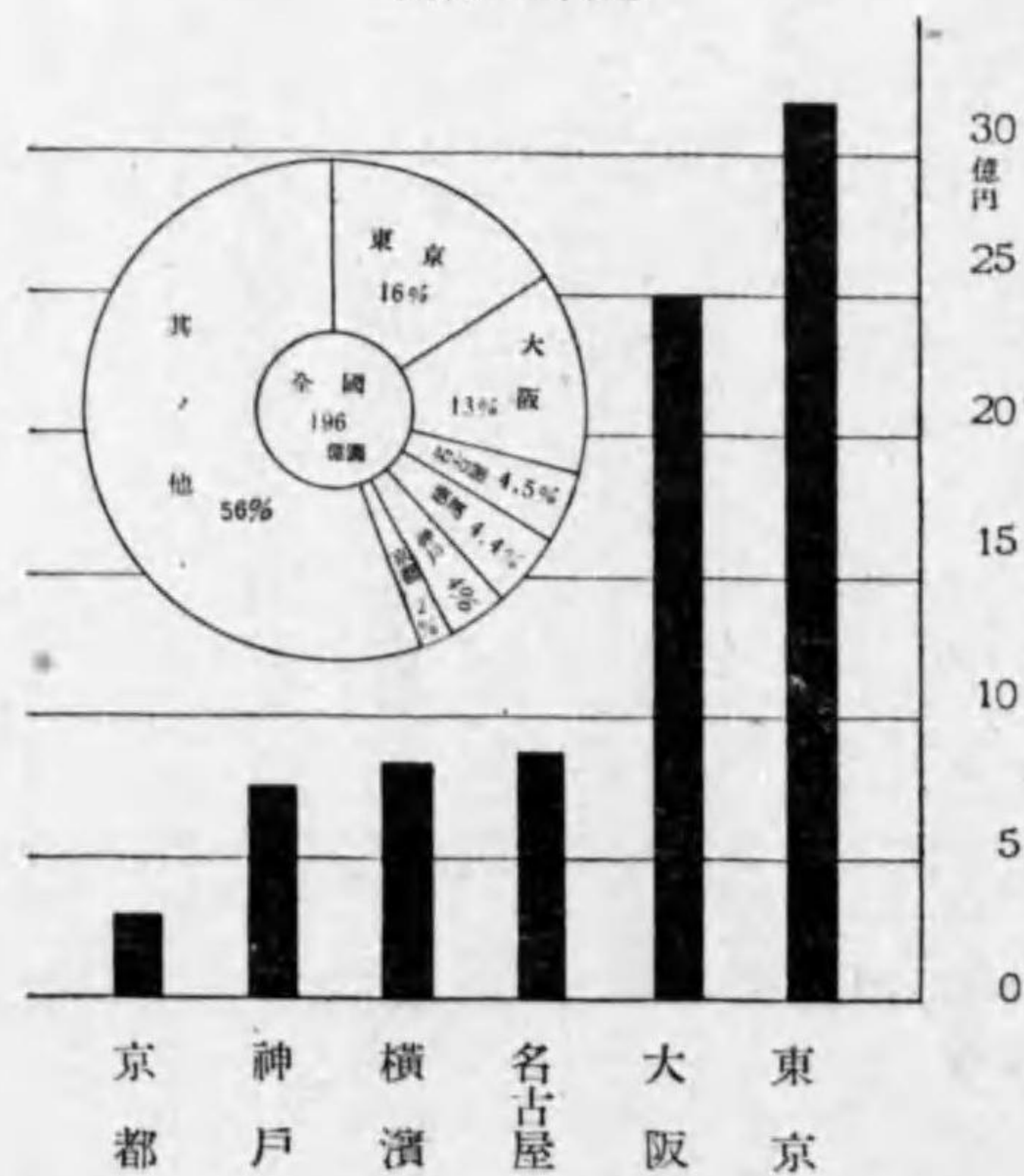
第一工業

一、工産額

先づ工業であるが、一體神戸市は一ヶ年に如何程の工産額を有するか、昭和十三年のそれは、七億八千萬圓となつてゐる。之は全國の總工産額百九十六億圓に對して四%に當つて居り東京の三十二億圓(全國の一六%)、大阪の二十五億圓(同一三%)、名古屋の八億六千萬圓(同四・五%)、横濱の八億四千萬圓(同四・四%)に次で六大都市中の第五位である。それでは

何を如何程生産してゐるか、右七億八千萬圓を事業別に見ると第二圖の示す如くである

第三圖 六大都市の工産額 (昭和13年度)

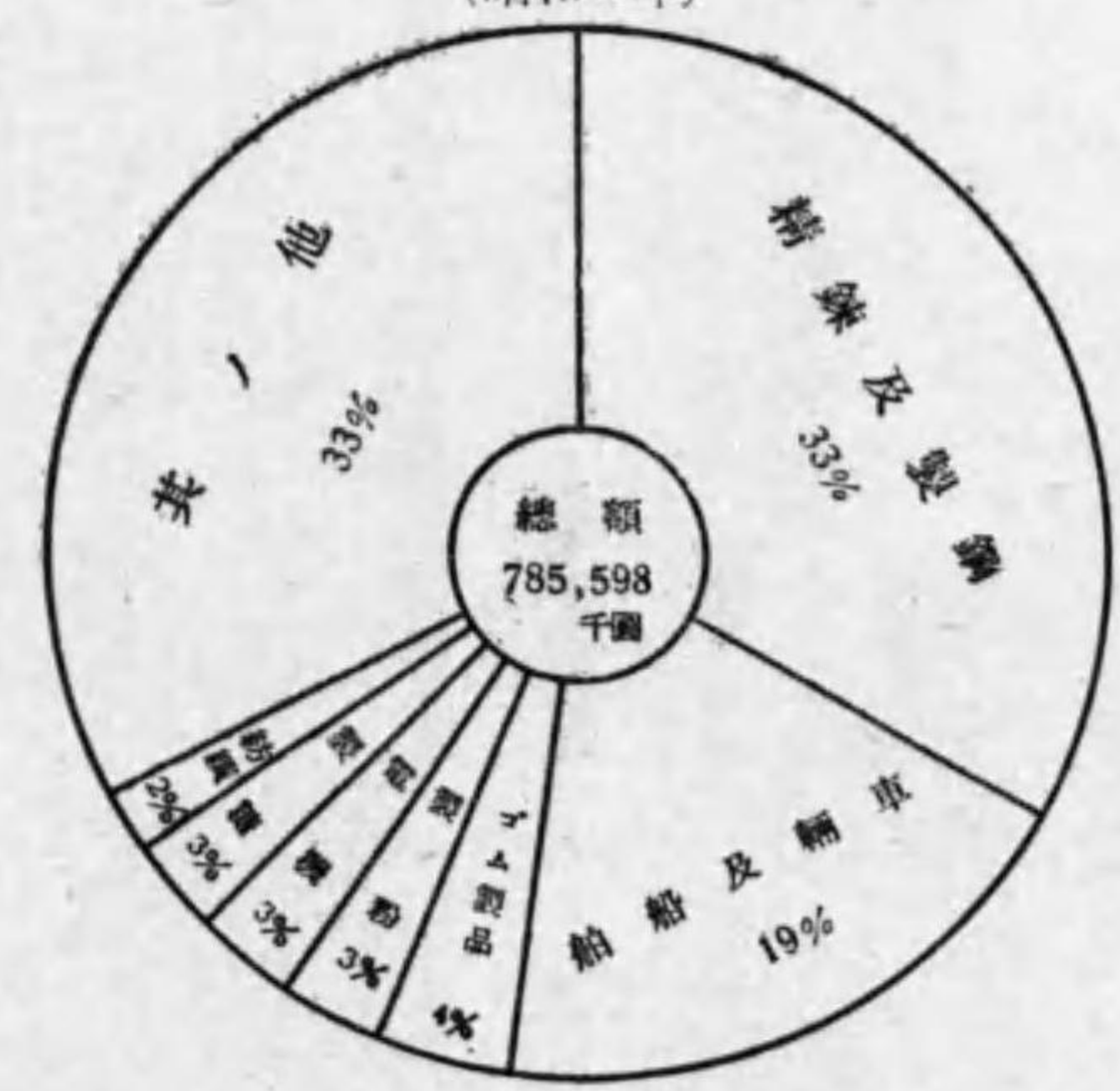


が、之を業種別に見ると、本市の代表的なものは、製鋼、船舶、車輛であつて、此の三者が右の五二%を占めてゐる。今、年産一千萬圓以上の業種を擧げると

製鋼及精鍊	二六〇萬圓	三三%
車輛、船舶	一五〇	一九%
ゴム製品	三四	四%
製粉業	二七	三%
電氣機器	二五	三%
製糖	二四	三%
紡績	一五	二%
油類	一三	一・六%
鑄物	一一	一・四%
蒸氣罐及内燃機關	一一	一・四%
履物類	一〇	一・三%

であつて、以上十一業種で五億五千九百萬圓、七二%を占めてゐるのである。(第四圖参照)

第四圖 神戸市の主要工業 (昭和13年)



後にも述べる如く本市の近代工業は、先づ重工業に始まつたのであるが、今假に、金屬工業と機械器具工業を重工業として見ると、本市の工業は

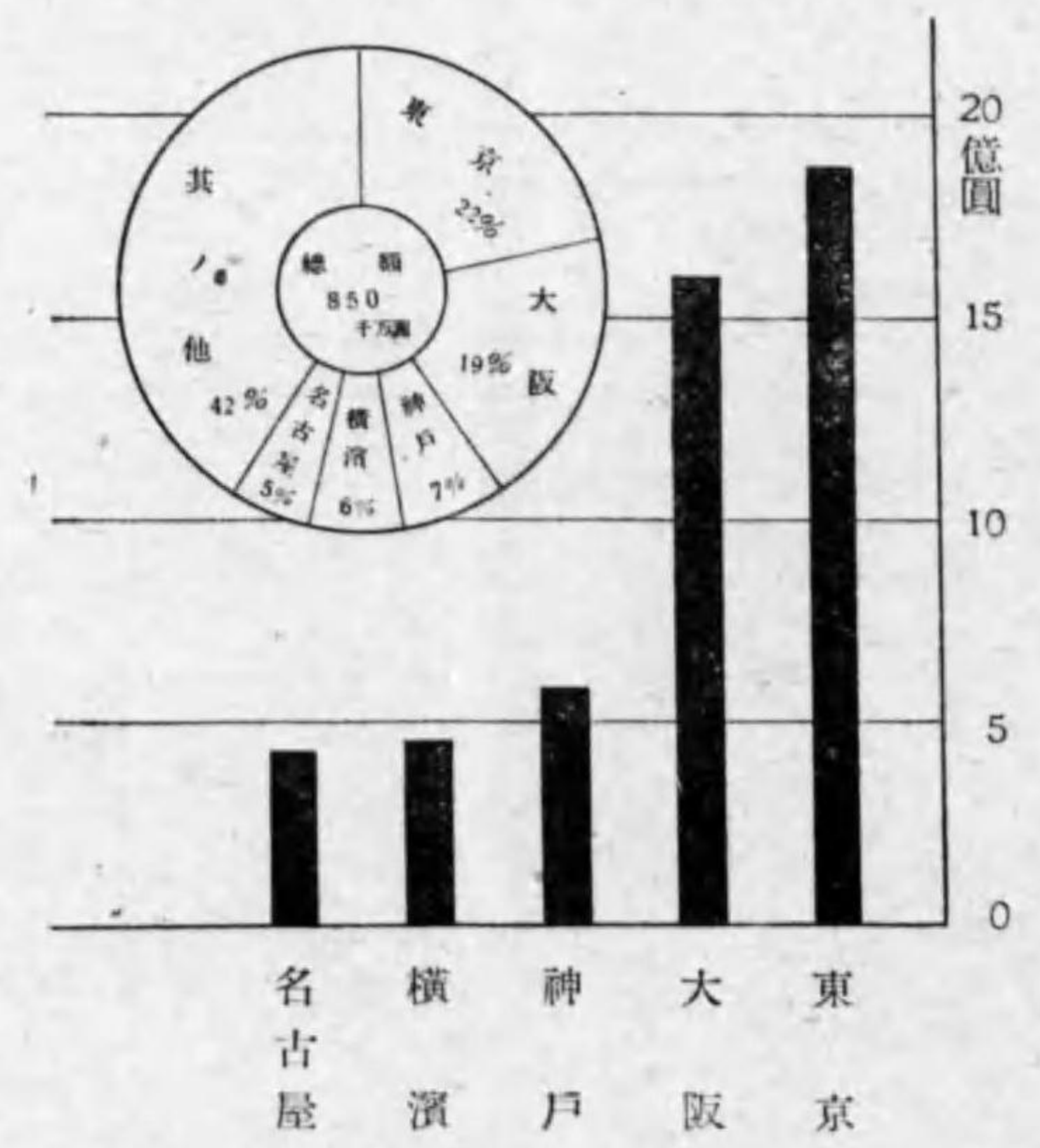
重工業	七一%
化學工業	一〇%
其他	一九%

となるのであつて、(第二圖参照)之を

東京市の重工業	五七%
大阪市の	六二%
横濱市の	五九%
名古屋市の	五〇%
京都市の	二九%

に比して本市が、今日猶その傳統を傳へてゐることが窺はれる。

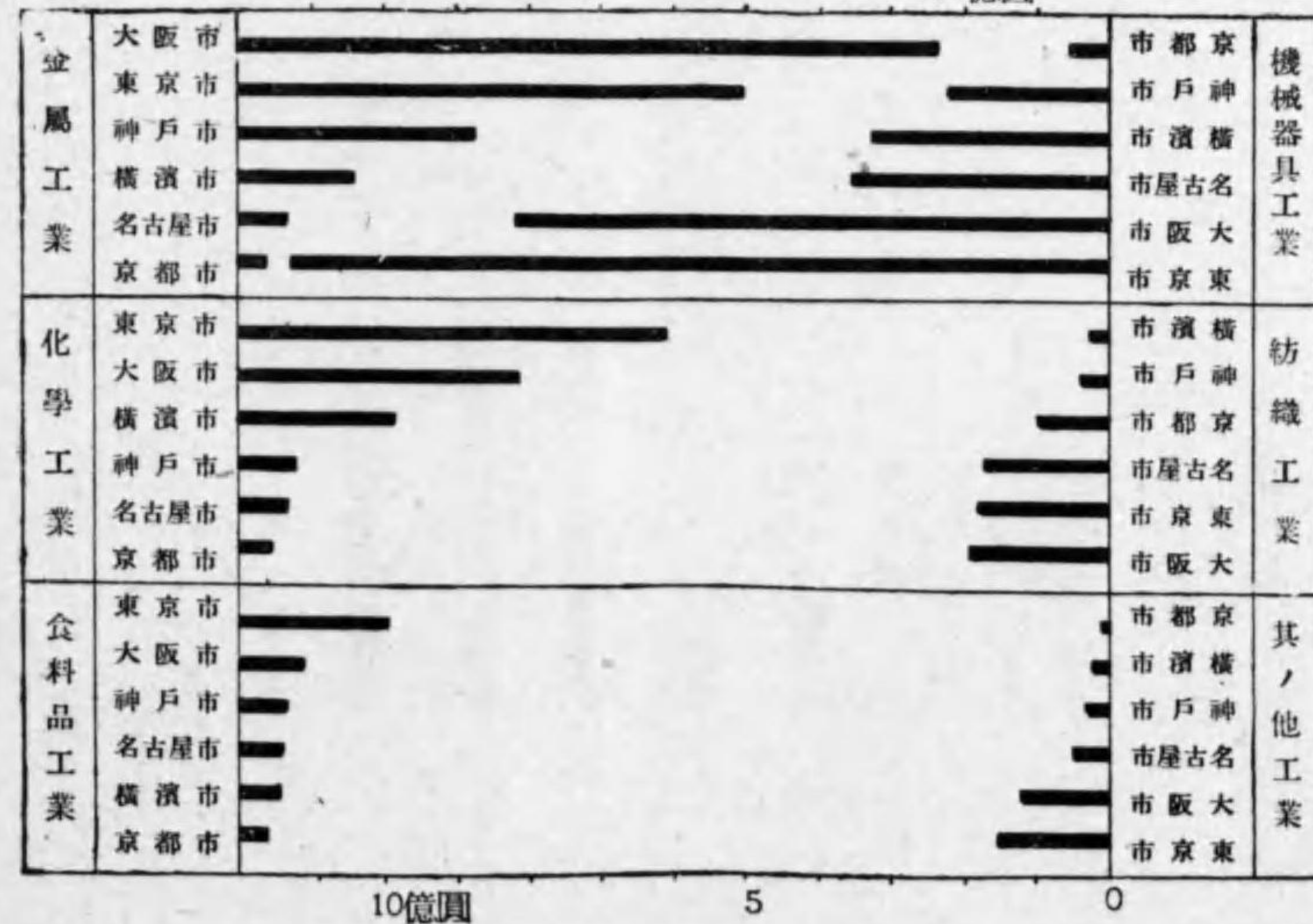
第五圖 六大都市の重工業 (昭和13年)



第三表 六大都市工産額比較 (昭和13年 使用職工5人以上)

事業別	全 國	東京市	大阪市	名古屋市	横濱市	神戸市	京都市
總 額	19,667	3,195	2,542	863	837	774	316
金屬工業	4,687	708	959	76	166	330	37
機械器具	3,822	1,129	618	355	327	222	55
化學工業	3,461	591	398	65	204	80	49
窯 業	404	31	53	23	18	1	6
紡織工業	3,985	184	189	170	24	27	101
製材及品	457	40	45	38	6	6	10
印刷	231	129	68	12	2	4	7
食 料 品	1,786	210	88	64	62	70	38
瓦斯及電氣	47	14	—	—	15	8	8
其 他	737	158	128	55	12	24	4

第六圖六大都市の工産額 (事業別) (昭和13年)



此の様に本市は、重工業都市としての看板を掲げ、しかもその古い傳統にも拘らず、今日の我重工業に占むる地位は、遺憾ながら全國重工業工産額の七%を占めてゐるに過ぎない。即ち

東京市は 二二%
 大阪市は 一九%
 神戸市は之に次ぎ、
 横濱市は 六%
 名古屋市は 五%

となつて居り、全國の五八%が此の五大都市に集中してゐるわけである。

次に各事業別に神戸市工業の地位を調べて見ると、食料品工業を除いては何れも第五位であつて、工業都市としては、東京、大阪には遙かに及ばず、横濱、名古屋にも一步を譲つて居る有様である。

之は一に本市の市域が、工業に對して夙くより飽和状態に達して居つた事を如實に物語るもので、西は南播平野、東は伊丹平野に、最近急速に延びつゝある工業地帯は、何れも神戸港の哺乳に培はれたものと言ふべく、之を切離して今日の神戸の工業を語る事は、既に無意味に近いのである。

第三表。

規模別工場數

事業別	5人未満		5人—29人	
	工場數	生産額 千円	工場數	生産額 千円
紡織	67	7,488	40	11,672
金屬	94	2,248	161	10,363
機械器具	191	4,672	331	18,083
窯業	8	510	3	598
化學	53	1,765	91	25,589
製材・木製品	168	6,261	109	4,252
印刷・製本	7	1,189	79	3,243
食料品	98	7,804	127	7,783
瓦斯・電氣	—	—	—	—
其他	28	6,034	190	7,784
合計	714	37,974	1,133	89,370

工業生産額は以上の如くであるが、では之等が、如何なる工場て生産されてゐるか、昭和十三年末の本市の工場は、總數二、一三〇工場であるが、之を使用職工數によつて規模別に分けるに

五人未満の工場	七一四	三四%
五人—三〇人未満の工場	一三三	五三%
三〇人—百人未満の工場	一八九	九%
百人以上の工場	八四	四%

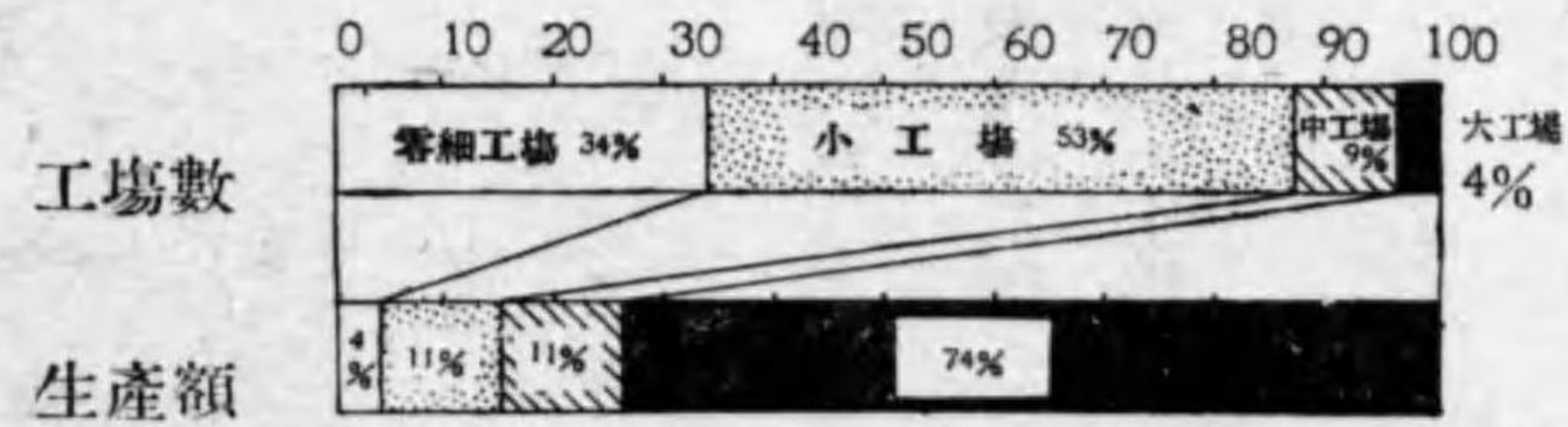
となつてゐる。之等の工業が、前記の生産額、七億八千五百万圓をどの様に分擔してゐるかをみると、

二、工場

及生産額 (昭和13年)

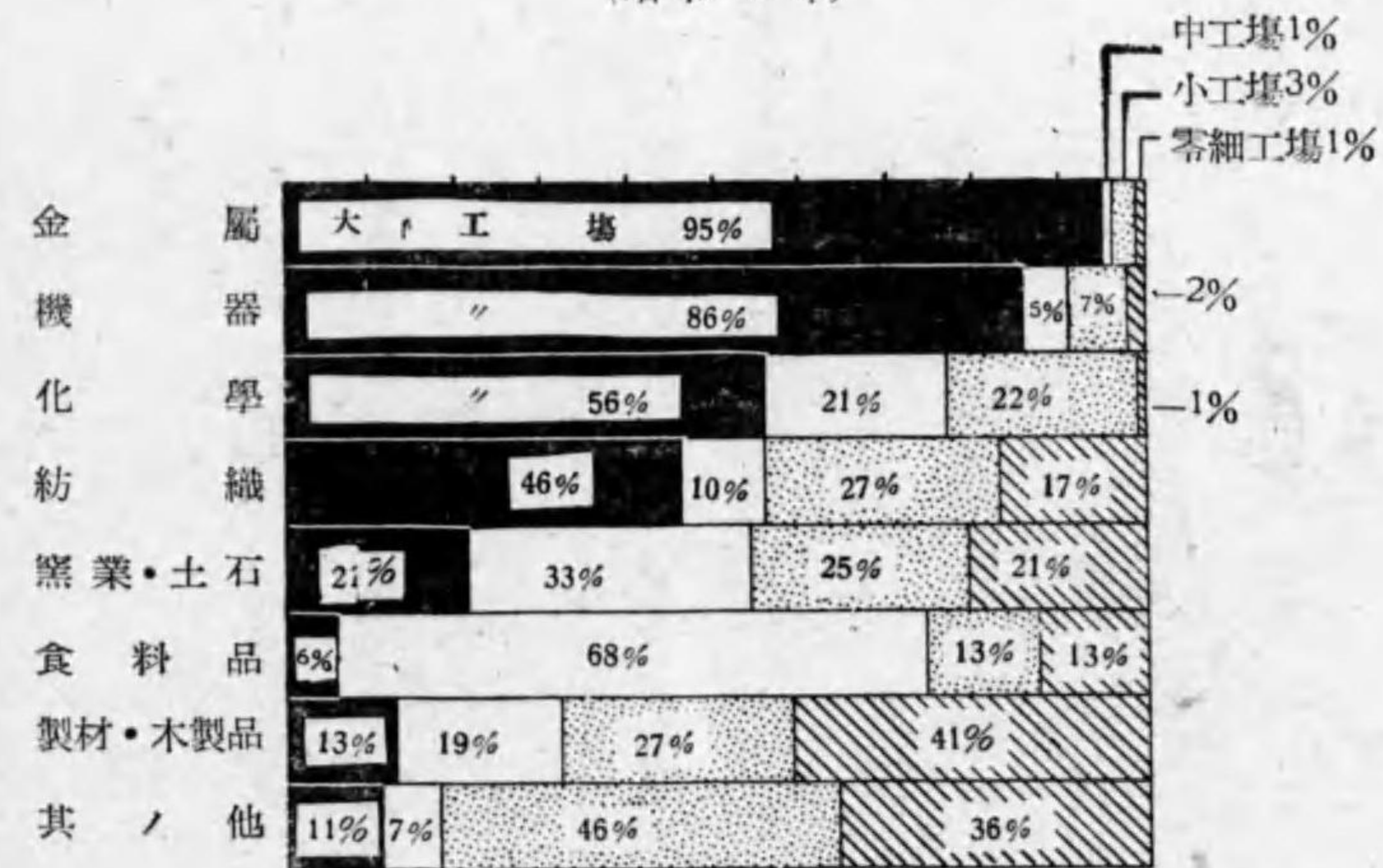
30—99人		100人以上		合計	
工場數	生産額 千円	工場數	生産額 千円	工場數	生産額 千円
15	4,173	8	19,703	130	43,038
18	3,621	7	290,919	280	307,151
45	13,363	30	229,461	597	265,580
2	799	2	492	15	2,399
36	25,268	15	66,036	195	118,658
5	2,919	1	1,974	283	15,410
12	1,680	—	—	98	6,122
24	41,244	6	3,830	255	60,661
—	—	—	—	—	—
31	1,169	11	1,922	263	16,909
189	94,236	84	627,067	2,120	848,647

第七圖 規模別工場數と生産額 (昭和13年)



零細工場 三七、九七四千圓 四％
 小工場 八九、三七〇 一一％
 中工場 九四、二三六 一一％
 大工場 六二七、〇六七 七四％
 となるのであるが（第七圖）、之を業種別に見ると第八圖の如く、食料品工業では中工場に雑品工業では小工場に著しく集中してゐる。此の雑品工業の多くは輸出品工業であるが、之等が猶手工業の域を脱してゐないことの一ツの現れである。

第八圖 規模別工産額（事業別）
 （昭和13年）



三、職 工

次に之等の工場で働いてゐる職工が如何程あるかと言ふと、昭和十三年末には、總數八六、四四六人であつて、此の内

男工 六九、四一四人 八〇％
 女工 一七、〇三二人 二〇％

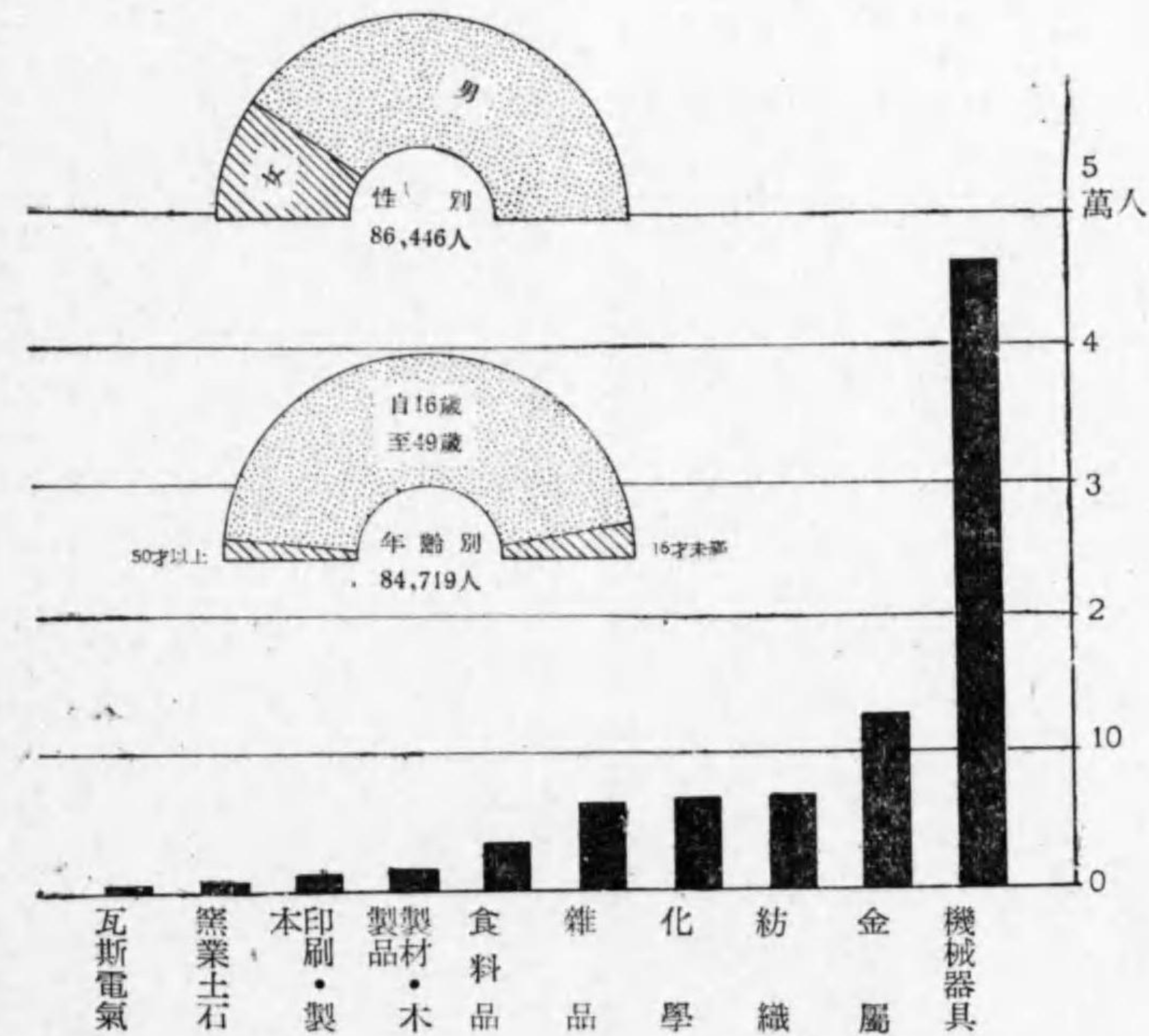
となつて居る。之を年齢別に見ると、（使用職工五人以上の工場の職工）

一六歳未満 四、一三二人 五％
 一六歳—四九歳 七八、五六五人 九三％
 五〇歳以上 二、〇三二人 二％

となつて居り、尙事業別には

金属工業 一二、五九二人 一四％
 機械器具工業 四六、五七七人 五四％
 化学工業 六、八五一人 七％

第九圖
神戸市の職工數 (昭和13年)



窯業土石	四二六人	〇・五〃
紡織工業	七、〇四四人	八〃
製材・木製品工業	一、四九九人	二〃
食品工業	三、三六八人	四〃
印刷及製本業	一、三一九人	二〃
瓦斯及電気工業	二、三三三人	〇・三〃
其他	六、五三七人	八〃

である。

四、原動機及動力

以上の如き本市の工場は如何にして動かされてゐるか、先づそこに使用せる原動機を見るに、昭和十三年末には一七、〇七八臺、二九二、六六六馬力であつて職工一人當り三八・五馬力となる。之を種類別に見ると、

蒸 汽 機 關

一〇八臺

四、九九九馬力

蒸汽タービン	一〇〃	一七、六八九〃
瓦斯機關	一一〃	二、八七四〃
石油機關	一四〃	二、一九八〃
電動機	一六、八八二〃	二六四、六三七〃
其の他	五三〃	二六九〃

となつて居り、事業別には

金屬工業	一〇、〇八二馬力	三・五%
機械器具工業	一六六、二五七〃	五六・九〃
化學工業	二、三八九〃	〇・八〃
窯業	一四六〃	〇・〇五〃
紡織工業	六一、四五三〃	二〇・九〃
製材・木製品工業	三七六〃	〇・一〃
印刷・製本業	一〇、五一九〃	三・七〃
食品工業	三、八八九〃	一・三〃

瓦斯及電氣工業	三一、八一〃	一〇・八〃
其の他工業	五、七四四〃	一・九〃

となつてゐる。而して之等の原動機を動かす爲に、一ヶ年に

石炭	六一四、六四九噸
コークス	三一三、九二九〃
木炭	一四、〇三六〃
石油	一九、二八七疋
瓦斯	六五二、五七三千立方米
電力	二九〇、五九六千キロワット時

を消費してゐるのである。(昭和十三年)

五、神戸市工業の沿革

今日の本市工業の全貌は以上の如くであるが、慶應三年兵庫開港以來七十年、如何にしてそれが造り上げられたか。

第一に此處に根を下したのは、開港間もない明治二年、外人經營のツレヂング商會の建設した川崎濱の製鐵工場である。次で翌三年には、金澤藩が、同じ場所に精銅所及軍器製造工場の建設に取かゝつたが、後幾許もなく工部省が之等の工業の國家的重要性に着目して、先づ金澤藩の工場を買上げて之を官營に移し、次で右ツレヂング商會の工場をも併せ、船渠をも開設して名を兵庫造船所と改めた。之が現在の川崎造船所の前身であつて、即ち明治十九年に至つて川崎正藏がその拂下げを受け、川崎造船所と改稱したのである。かくて工業神戸は、重工業と共に呱呱の聲を上げたのである。

第二に植付けられたものは、マッチ工業である。之は、明治十一年頃より石井の監獄内の囚勞を利用して、所謂手工業的家内工業の形を以て始められたのであるが、事後著しき發展を遂げ、明治二十年頃には既に我國輸出工業の一つとなつて居るのである。

次で明治二十年から日清戦役前後には、樟腦工場が盛に設立されて居る、即ち、十九年の小松樟腦、二十二年の住友樟腦、二十六年の葺合樟腦であつて、明治二十八年には五工場を數へ、其の産額もマッチ工業に次で居るのである。

次に三十年より日露戦役前後は我國工業躍進の一時期であるが、此の間に於て、神戸工業史上特に注目すべきものは、二十九年の鐘淵紡績の兵庫分工場の開設と、同四十二年のダンロップゴムの神戸進出である。前者は名古屋及大阪と共に、神戸を綿業地の一に列せしめ、後者は現在神戸工業の表看板の一であるゴム工業發展の端をなした。即ち、大正元年には大正ゴム、同二年の内外ゴムを始め、之を中心として中小ゴム工場の著しい簇生を見、日本ゴム工業に於ける押しも押されぬ地位が築かれたのである。

更に此の時期に於て忘れてはならないことは明治四十四年鈴木商店の神戸製鋼所の經營である。此の製鋼所は之より曩、明治三十八年の創設にかゝる小林製鋼所の、成績思はしからずして投げ出されたものを承継いたのであるが、之は、大正五年の日本金屬の神戸工場の開設と共に本市工業の上に異彩を添へ、今日その太宗をなしてゐることは既に見た通りである。

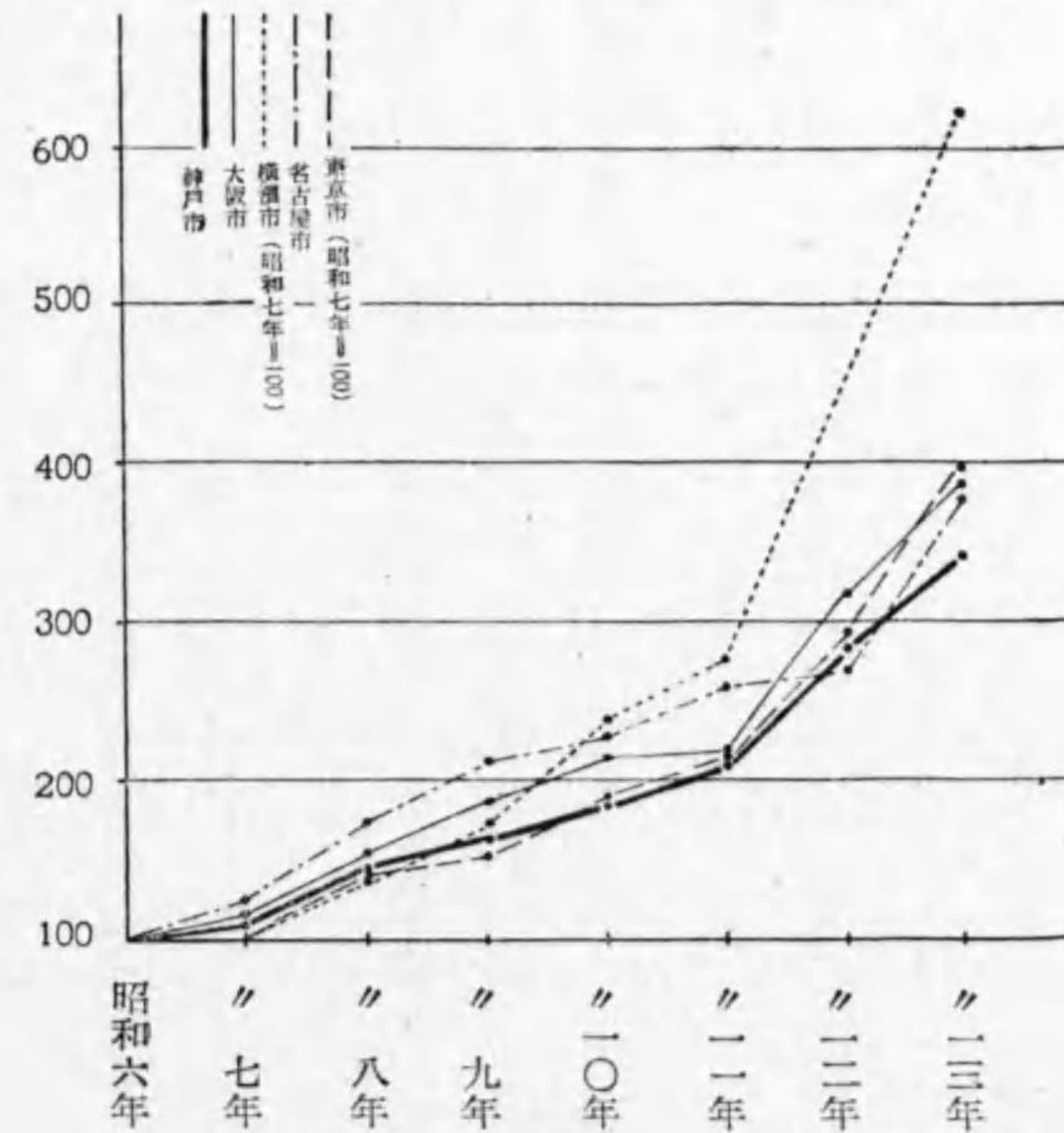
此の外、三十三年には臺灣製糖の神戸工場の開設があり、樟腦では三十五年鈴木の小野濱製腦所に續いて四〇年には朝日樟腦の設立を見、之等は同年の日本燐寸の設立と共に神戸化學工業の發展を劃して居り、他方重工業では、三十三年和田岬の三菱造船所に次で四〇年には川崎造船所が兵庫分工場を開いてゐる。

此の様にして大正初期には既に神戸工業の骨格が出来上つた、折柄大戦景氣の波に乗じて、我

第五表 五大工業都市工産額累年表
(使用職工5人以上ノ工場)

年次	神戸市	大阪市	横濱市	名古屋市	東京市
昭和6年	225,507	671,000	—	242,352	310,139
〃7年	245,292	755,000	163,676	306,024	848,139
〃8年	317,743	1,039,650	217,711	414,781	1,182,582
〃9年	367,379	1,261,434	278,152	515,720	1,327,455
〃10年	414,504	1,417,078	374,409	551,899	1,598,677
〃11年	486,504	1,473,291	448,831	608,461	1,830,217
〃12年	640,730	2,146,014	—	640,915	2,505,534
〃13年	785,599	2,541,680	836,612	894,121	3,327,907

第十圖 五大工業都市工産額趨勢(指數)



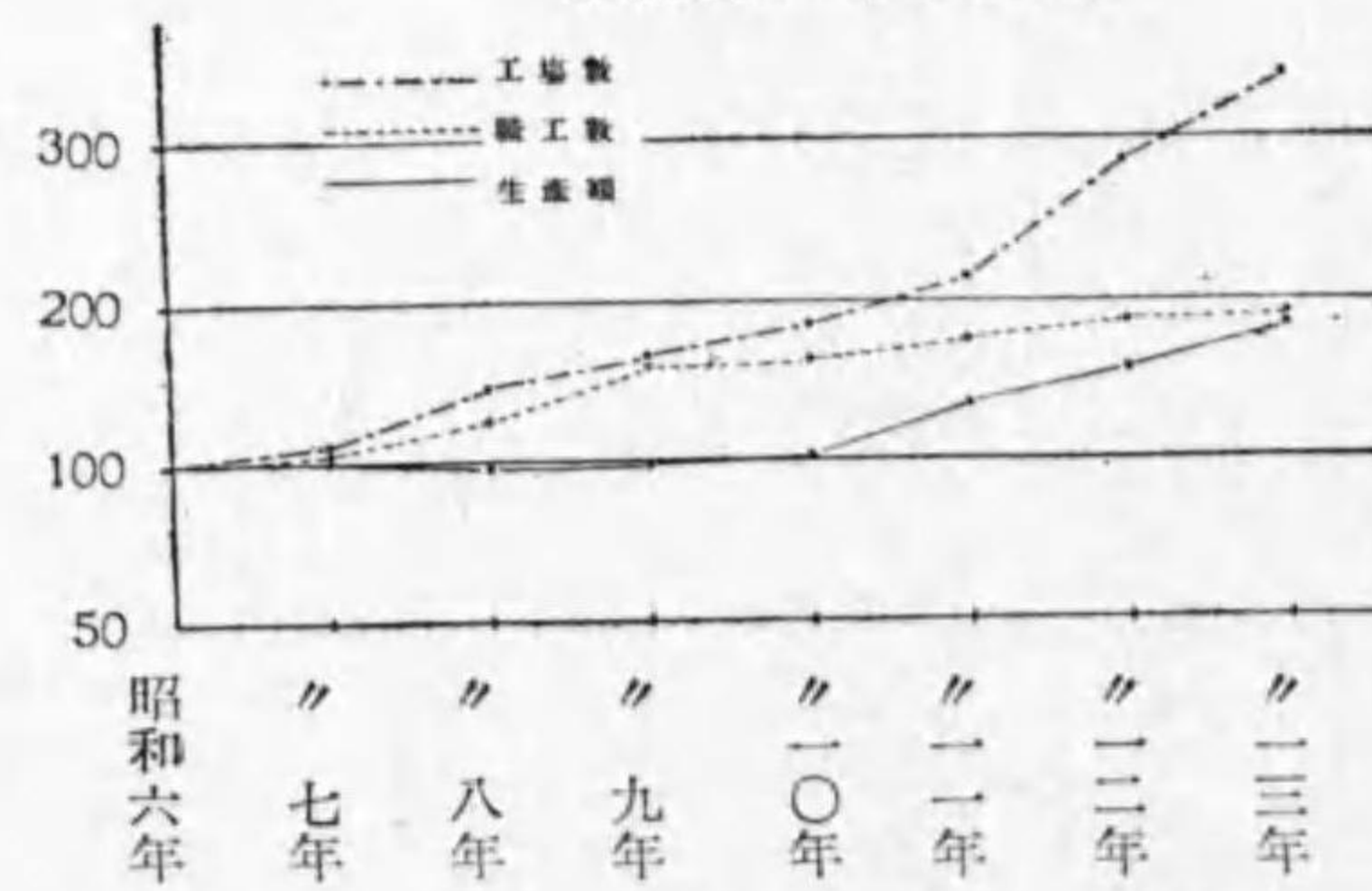
國一般産業界と共に一大飛躍を遂げ、大正七年には明治末期に比し工場數に於て約十倍となつて居る。次で大正末期の反動期、昭和初期の沈衰期を経て、同六年滿洲事變以來、準戰時體制に入るや、一方重工業の股賑と共に、他方輕工業に於ても金輸出再禁による爲替安に恵まれて輸出品工業の黄金時代に向つたのである。

六、最近の趨勢

然し此の準戰體制より戰時體制への過程に於て注目すべきことは神戸市の工業が、他の四大工業都市の躍進に比して此の二三年來著しく緩慢となつたことである。例へば第十圖によるも大阪、名古屋の如く多くの

年次	工場數	職工數	生産額
昭和6年	853	45,433	225,507
〃7年	858	48,227	245,292
〃8年	833	55,307	317,743
〃9年	859	62,073	367,379
〃10年	893	67,376	414,420
〃11年	1,180	77,969	486,504
〃12年	1,342	84,934	640,730
〃13年	1,406	86,446	785,599

第十一圖 神戸市工業の趨勢(指數)
(使用職工5人以上工場)



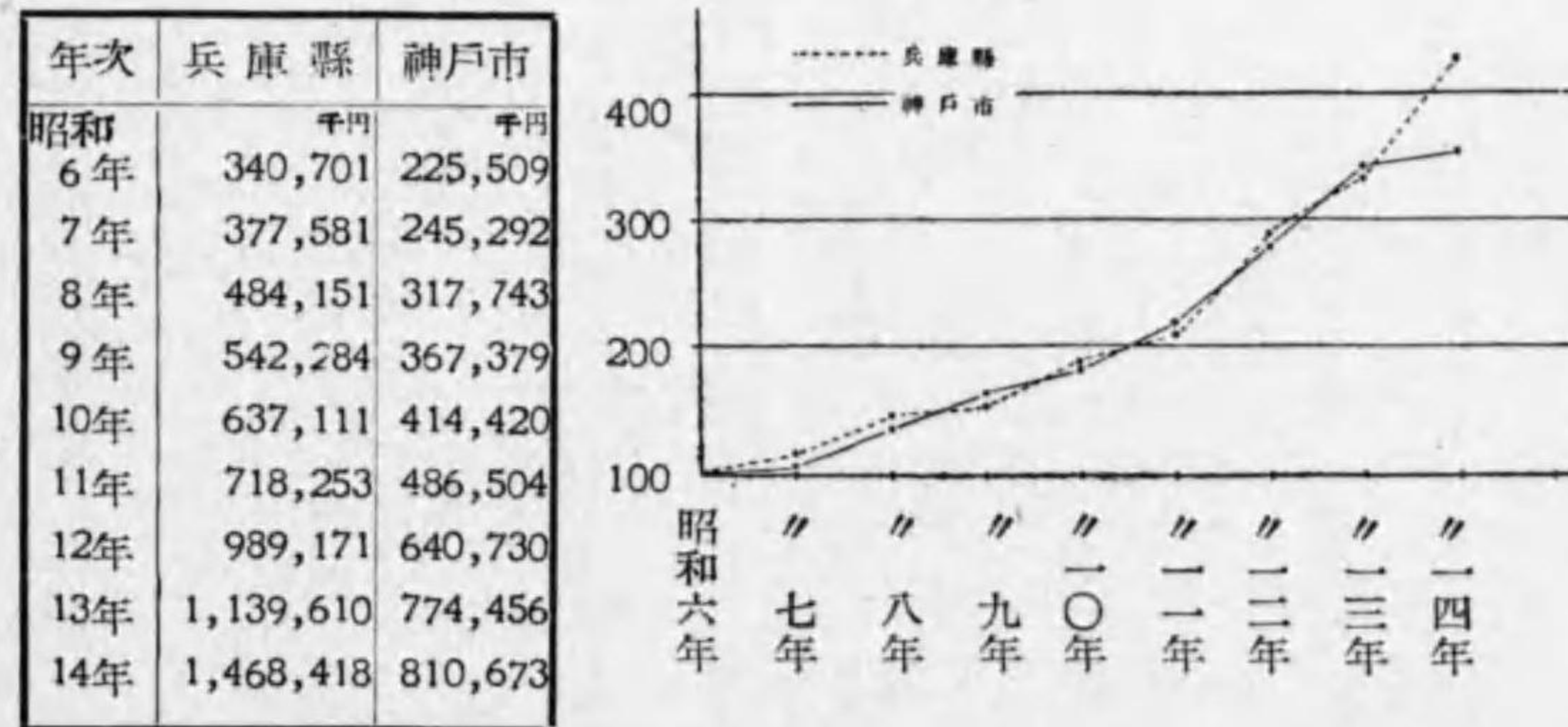
戦時に於ける縮少部門たる平和産業を包藏しながらも、本市に比して急角度の上昇を示してゐる。

之は前にも述べた如く、大正時代の日本工業發展期に於て本市の工業が、既に飽和状態に達して居つたことに由來するもので、僅かに三十五平方料に過ぎない平地面積を以て、よく五大都市に比肩し得る工業を支へて來た本市は、最早新なる立地を残さなかつたであらうことは推測に難くないであらう。

然し日本の工業は、港を哺乳管として其の周邊に立地を求めざるを得ないと言ふ性格を有つてゐるのであるが、それは神戸港を哺乳管とする工業は何處へ行つたか。勿論經濟活動には行政區域もない。西は尼崎に至る海濱を底邊とする東攝の野に、東は須磨の關所を越えて飾磨港を結ぶ神姫線を軸として南播の野に范濫して行つたことは周知の通りである。

此のことは第十二圖に示す如く縣市工産額趨勢の昭和十三年を境とする急角度の乖離となつて現れてゐる。

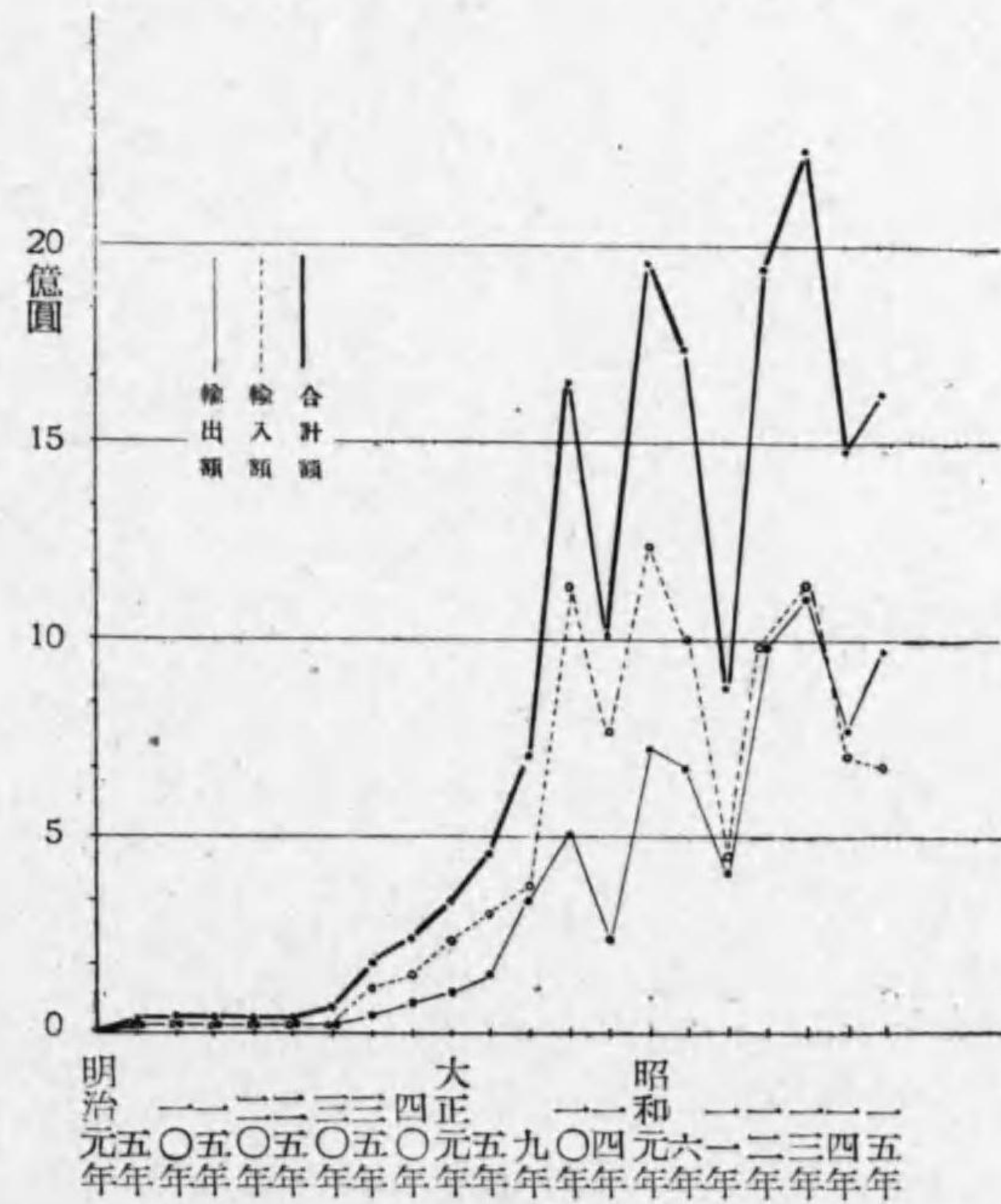
第十二圖 縣市工産額趨勢
(使用職工5人以上工場)



第六表 神戸港外國貿易の趨勢

年次	輸出額	輸入額	合計	年次	輸出額	輸入額	合計
明治元年	千円 449	千円 687	千円 1,137	大正5年	千円 331,104	千円 374,099	千円 705,203
5年	1,992	4,412	6,405	9年	518,987	1,127,576	1,646,564
10年	4,657	4,257	8,914	10年	229,144	768,209	997,353
15年	6,514	6,378	12,893	14年	715,933	1,220,404	1,936,338
20年	12,770	13,854	26,624	昭和元年	680,682	1,052,418	1,733,100
25年	21,295	30,698	51,993	6年	409,011	457,739	866,751
30年	51,408	110,741	162,149	11年	970,784	958,219	1,929,003
35年	74,748	144,516	219,264	12年	1,107,551	1,119,514	2,227,066
40年	106,668	223,437	330,105	13年	774,038	706,257	1,480,295
大正元年	150,475	302,199	452,675	14年	959,909	686,533	1,646,442

第十三圖 神戸港外國貿易の趨勢



第二 貿易

一、神戸港の生ひ立ち

以上の如くにして、六甲山系を背にした此の狭い地域に、神戸市の工業を育て上げ、且つ、西に東に延びた今日の經濟圏を培つてゐる神戸港は、貿易港として如何にして生長して來たか。

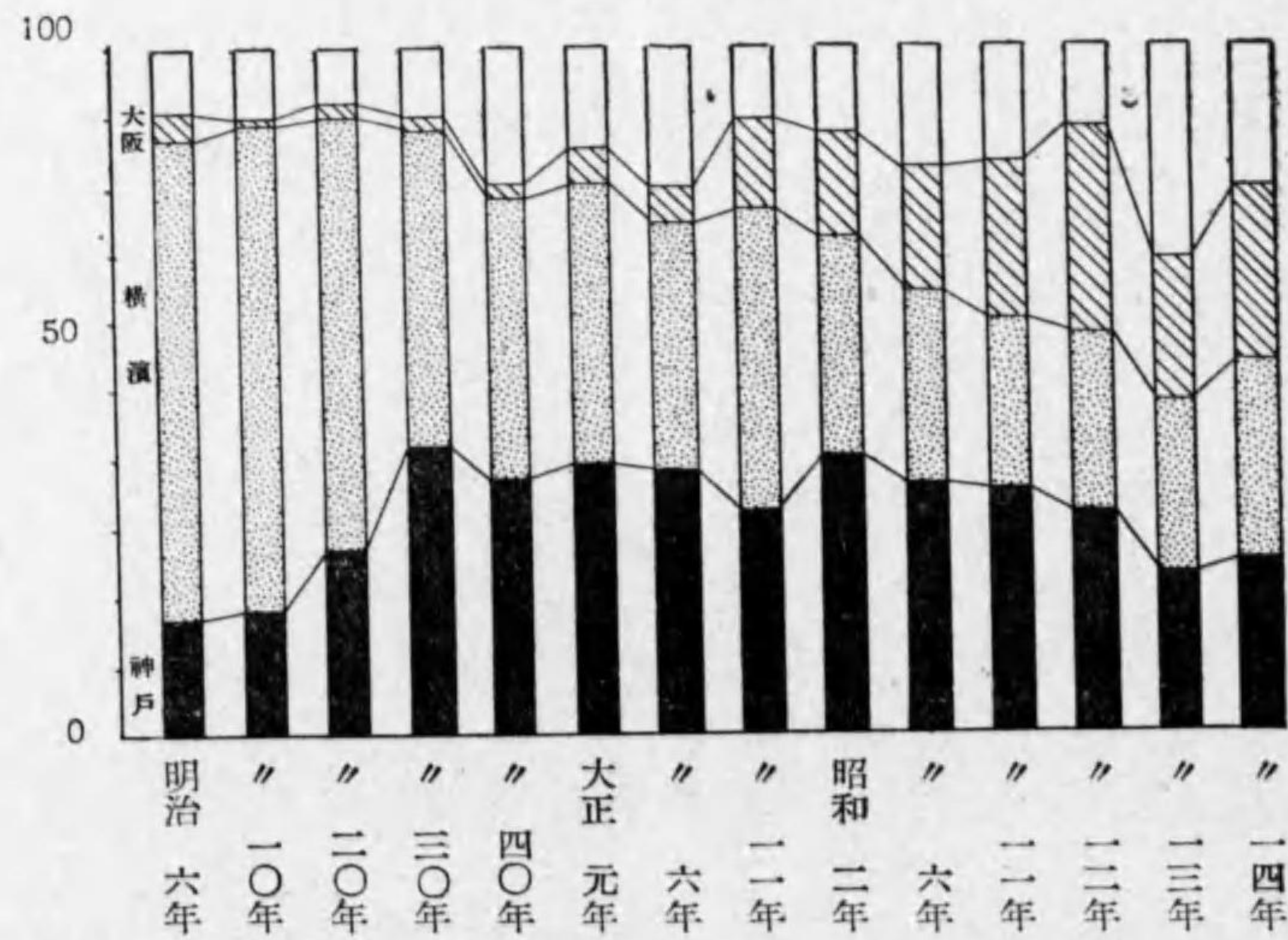
港として古い歴史を有つ兵庫港が、近代的國際都市として世界經濟の舞臺に登場したのは慶應三年十二月七日である。即ち翌四年正月二十八日には外國船改役を任命し、二月五日生田川尻舊海軍操練所跡に運上所を設け、右外國船改役を此處に駐在せしめて翌六日愈々開店したのである。次で同四月頃には外國商人も續々轉入して貿易港としての活動を始めたのであるが當初は所謂開店休業の状態で一向振はず、折角轉入して來た外商等も、神戸港は貿易港としての發展の見込なしとて横濱へ引上げて行くものもあつた。之は恐らく神戸港が、港灣としては天然に恵まれた良港であつたが、陸上交通機關の未開時代の當時に於ては經濟的に見て、位置の利を占めてゐなかつたと言ふことに原因して居つたと思はれる。當時の外國貿易の大部分は横濱港によつてな

第七表 三港貿易

年次	全 國	神 戸	横 濱	大 阪
明治 6 年	49,742	35,436	35,436	1,331
10 年	50,770	36,945	36,945	652
20 年	96,712	60,950	60,950	1,994
30 年	382,436	177,537	177,537	6,721
40 年	926,880	378,374	378,374	94,469
大正 元年	1,165,874	473,220	473,220	83,896
6 年	2,638,816	954,332	954,332	348,958

れて居つたの
であつて、神
戸港からは僅
かに緑茶の輸
出をやつてゐ
た位のもので
其の貿易額に
しても全國の
二―三%に過
ぎなかつた様
である。貿易
統計として最
も古い明治六
年に於ても神

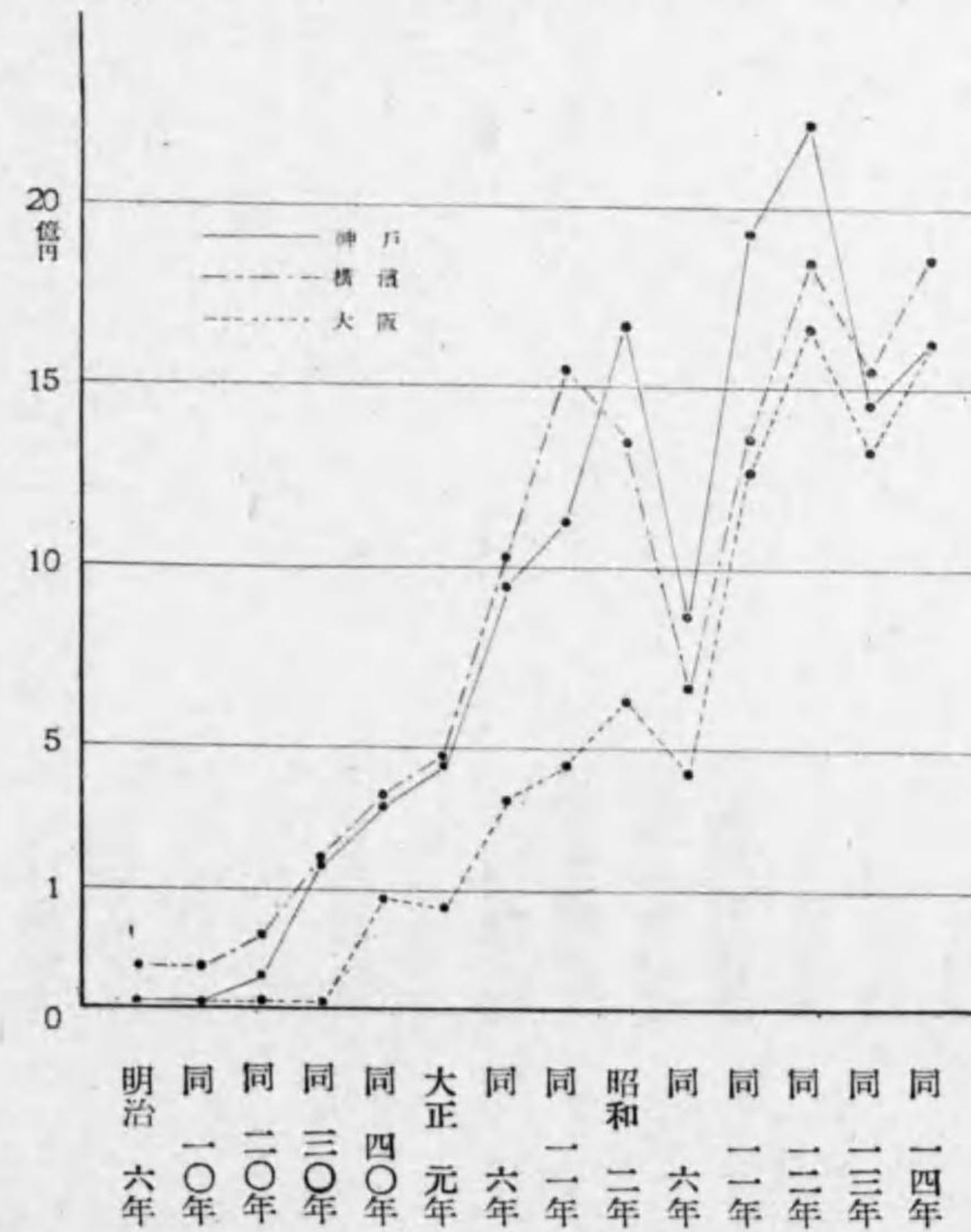
第十五圖 日本貿易に於ける三港の地位の變遷
(輸出入總額)



額 累 年 表

年次	全 國	神 戸	横 濱	大 阪
11 年	3,527,760	1,136,177	1,547,617	451,569
昭和 2 年	4,171,471	1,671,921	1,323,826	623,276
6 年	2,382,754	886,751	676,299	434,750
11 年	5,456,656	1,929,004	1,365,335	1,265,495
12 年	6,958,595	2,227,066	1,847,602	1,688,237
13 年	6,353,014	1,480,296	1,559,046	1,318,404
14 年	6,494,036	1,646,442	1,880,104	1,645,437

第十四圖 三港貿易額の趨勢

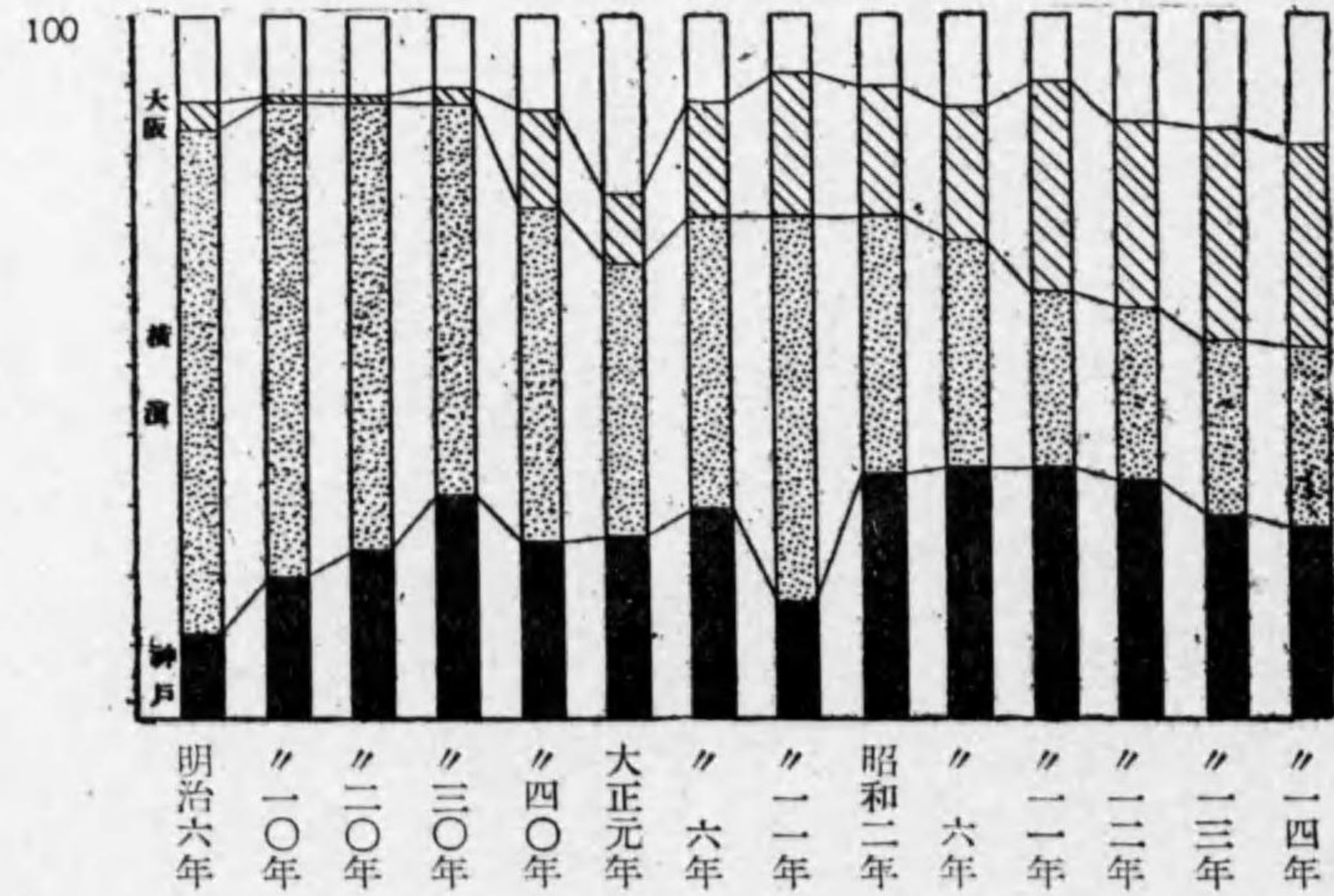


戸は全國貿易額の一七%に過ぎず、横濱は七一%を占めて居る。

所が維新の紛亂も漸く治まり、諸政改革も其の緒に着き、天下再び泰平に復するに及んで、雌伏三百年の浪速商人の企業熱が勃然と興り、次で、舊諸藩侯の其の資を之に投ずる者も出て來て年と共に何時の間にか、政治は關東、經濟は關西にと言つた様な分業が出来上つたのである。

斯うした大阪を中心とする關西工業の興隆に従つて之に要する機械類及原材料等の輸入及之が製品の輸出路は、當時大阪築港未だ備はらなかつた爲め、之を神戸港に求めねばならなかつた。當時工業として異常な躍進を遂げたのは紡績を中心とする輕工業であつて大阪では明治十六年頃既に日

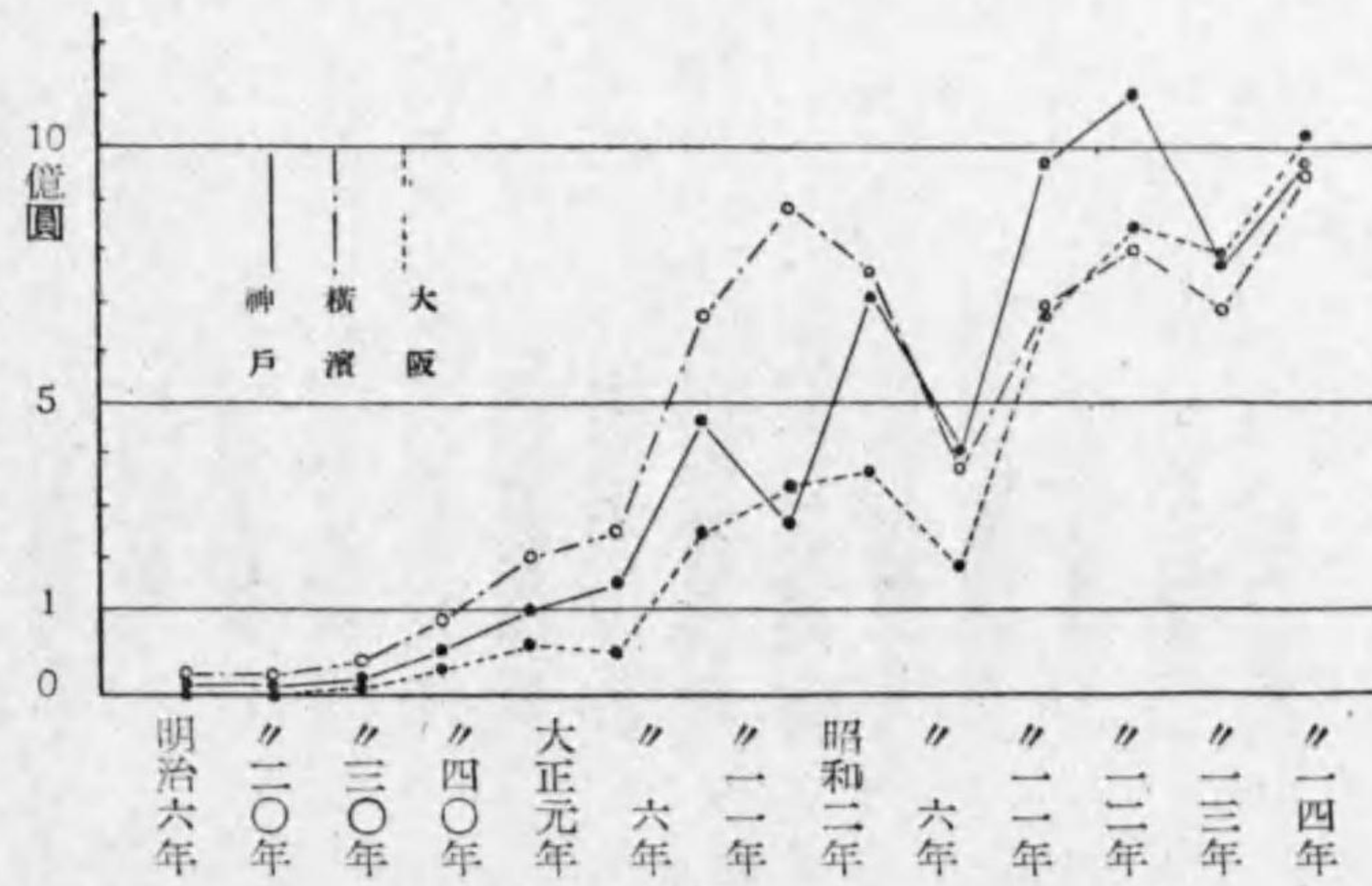
第十七圖 日本貿易に於ける三港の地位の變遷 (輸出)



第八表 三港輸出額累年表

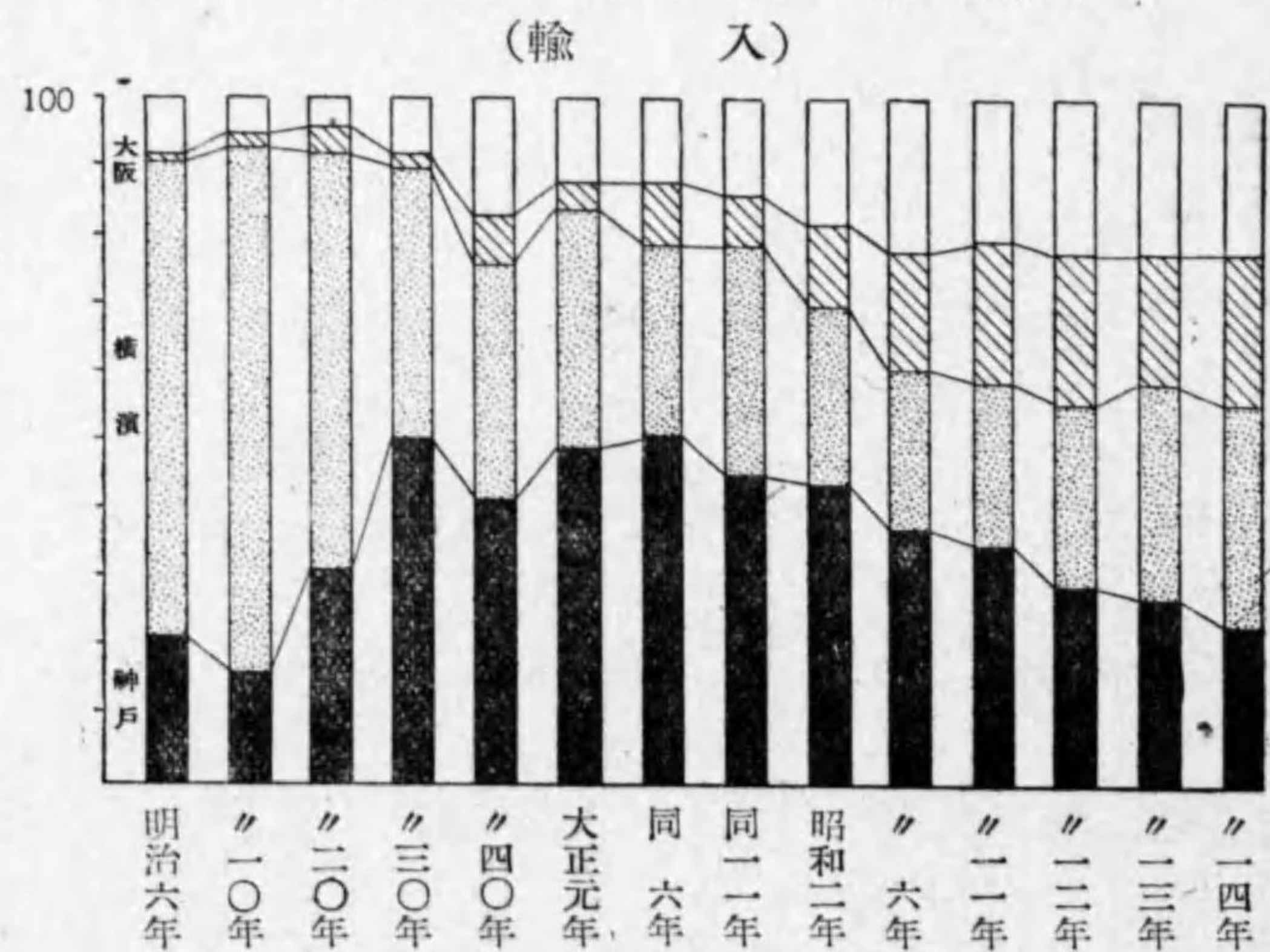
年次	全 國	神 戸	横 濱	大 阪
明治 6 年	21,635	2,517	15,694	916
10 年	23,349	4,657	15,916	200
20 年	52,408	12,770	33,775	372
30 年	163,135	51,403	90,700	3,165
40 年	432,413	106,668	205,888	60,038
大正 元 年	546,982	150,476	257,850	57,313
6 年	1,603,005	479,770	667,065	255,317
11 年	1,637,452	279,821	895,463	322,775
昭和 2 年	1,992,317	705,729	749,006	363,352
6 年	1,146,981	409,011	370,662	218,914
11 年	2,692,976	970,784	673,323	672,233
12 年	3,175,418	1,107,552	800,002	853,105
13 年	2,689,677	774,033	681,062	795,329
14 年	3,576,370	959,909	950,977	1,034,351

第十六圖 三港輸出額趨勢



本の綿業地として抜くべからざる地位を確保してゐたのである。又神戸に於ても、明治二十九年鐘紡の兵庫分工場の建設によつて其第一歩を踏出したことは前にも述べた。殊に神戸では前節で見た如く開港間もなく、精銅所、軍器製造工場、造船所等重工業の建設を見、同二十年前後にはそれが相當の發達を遂げて居るのである。此の様な工業の發展に伴つて、天然の良港に恵まれた神戸港の貿易は年々共に躍進し、漸次横濱港を追ひ詰め、明治晩年には夙も之を凌駕せんとする形勢を示して居る。殊に輸入額に於ては、三十年頃既に横濱を抜くこと一〇%と言ふ記録を示し、輸入港の貫録を見せて居るのである。神戸港の貿易が、此の様に輸入を中心

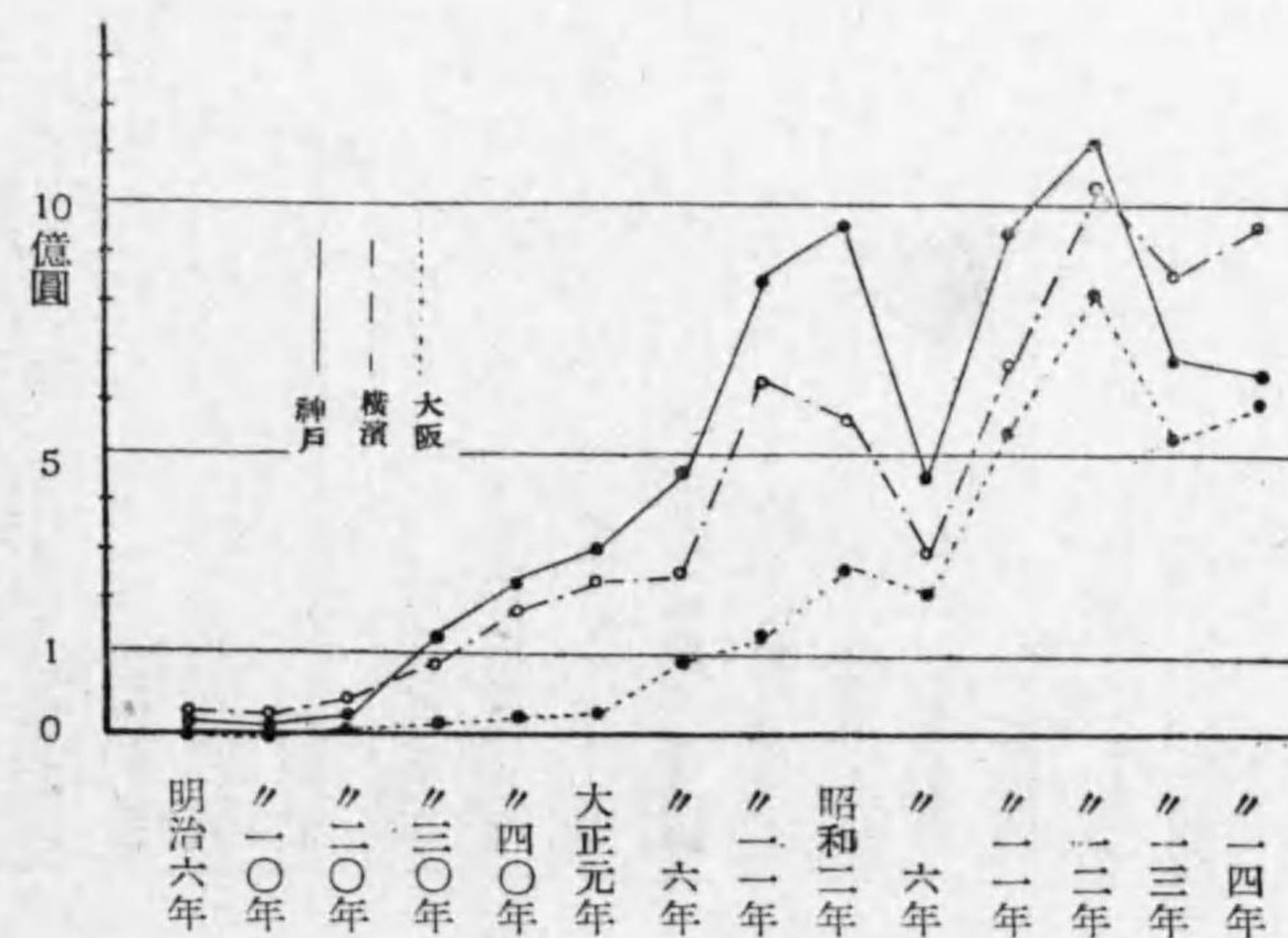
第十九圖 日本貿易に於ける三港の地位の變遷



第九表 三港輸入額累年表

年次	全 國	神 戸	横 濱	大 阪
明治 6 年	23,107	5,925	19,742	415
10 年	27,421	4,257	21,029	452
20 年	44,304	13,854	27,175	1,622
30 年	219,301	110,741	86,837	3,556
40 年	494,467	223,437	172,486	34,432
大正 元 年	618,992	302,119	215,370	26,583
6 年	1,035,811	530,929	287,267	93,642
11 年	1,890,308	856,356	652,154	128,794
昭和 2 年	2,179,154	966,192	574,820	264,924
6 年	1,235,673	457,738	305,537	215,836
11 年	2,763,681	958,220	687,012	593,264
12 年	3,783,177	1,119,515	1,047,600	835,183
13 年	2,663,337	706,257	877,981	518,076
14 年	2,617,666	686,534	929,127	611,086

第十八圖 三港輸入額趨勢



として發展して來たことは、關西殊に阪神地方が、夜を日に次いで工業化されて行つた當時の實情を物語つて居る。

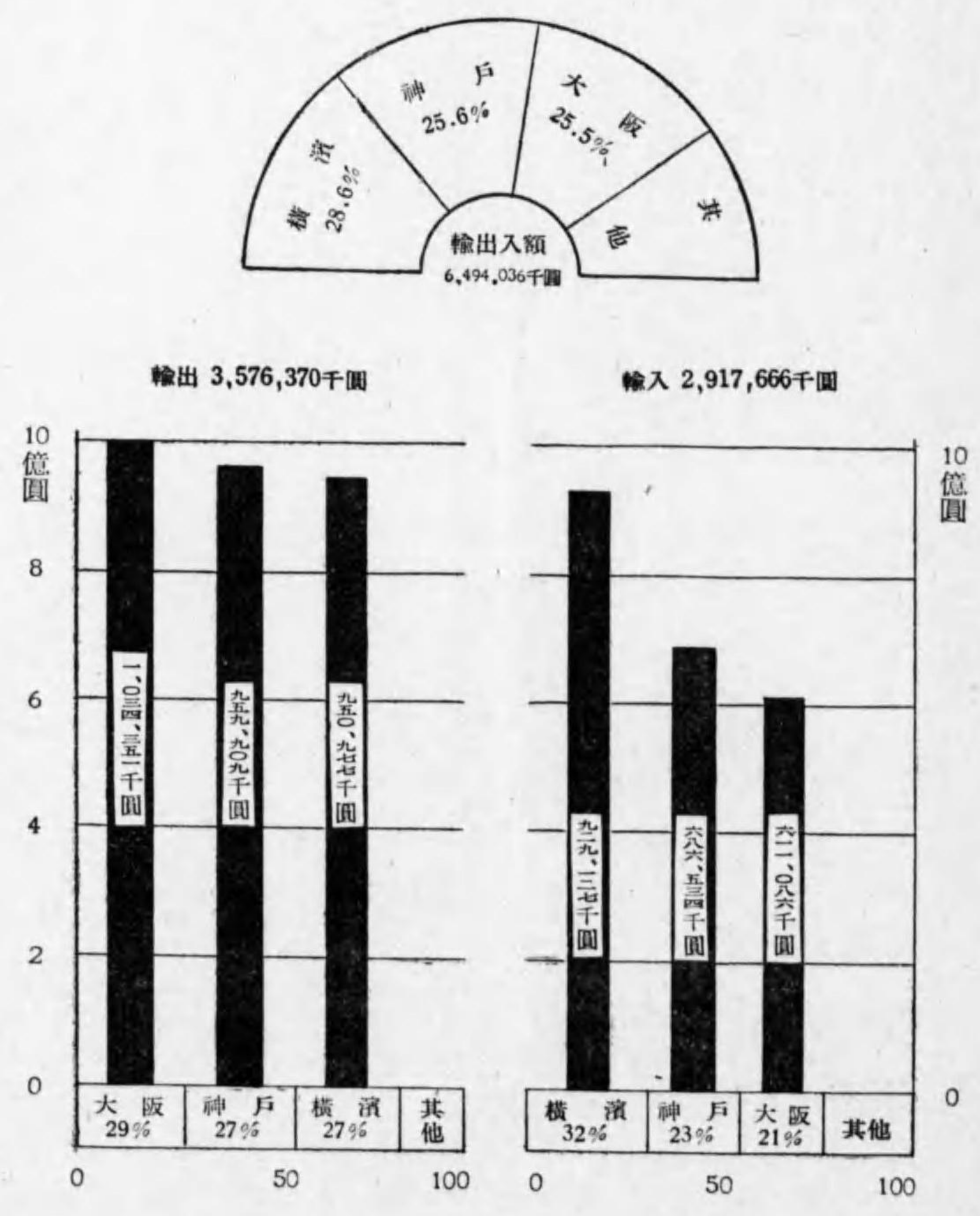
神戸港の此の發展に、尙一つの拍車となつたものは、明治十九年の山陽鐵道の開通及び之に續いて急速に進捗した畿内鐵道網の構築であつて、明治二十年を機とする輸出額の前圖に見る急角度の上昇は、之に原因するものと思はれる。

此の様に於て開港以來、阪神工業の母胎となつて活動を續けて來た神戸港は、阪神工業の隆盛と共に、貿易額に於ても横濱に匹敵し、輸入に於ては遙かに之を凌駕しつゝ、大正時代に入つて大戦景氣の波に乗り、其の反動期に於ても、折柄の關東大震災の爲横濱に代つて本邦第一位の王座を獲得したが、幾許もなく之を横濱に返還した。

次で昭和初期には又日本財界と共に沈衰の憂き目を嘗め、昭和六年金輸出再禁と共に再び輸出貿易振興の黄金時代を夢見たが、此の時既に國際市場を緯る經濟闘争漸く熾烈を加へ、國際關係亦紛議續出し、七つの海は沃雲、日に濃きを加へ終に昭和十二年七月七日瀘溝橋の朝霧を破る一發の銃聲を導火線として、ユーラシヤ大陸は遂に硝煙の覆ふところとなり、七つの海亦爆音に包まらるゝに至つた。此の砲煙の下に人類は、個人主義と自由主義を經緯として織りなされた衣を捨

て、新しい論理と新しい倫理の上に新しい生活秩序を造り出すとして居るのである。此の様な戦時下の混沌たる國際經

第二十圖 本邦貿易と三港 (昭和14年)



濟の中で、神戸港は今日如何なる活動を續けつゝあるか。

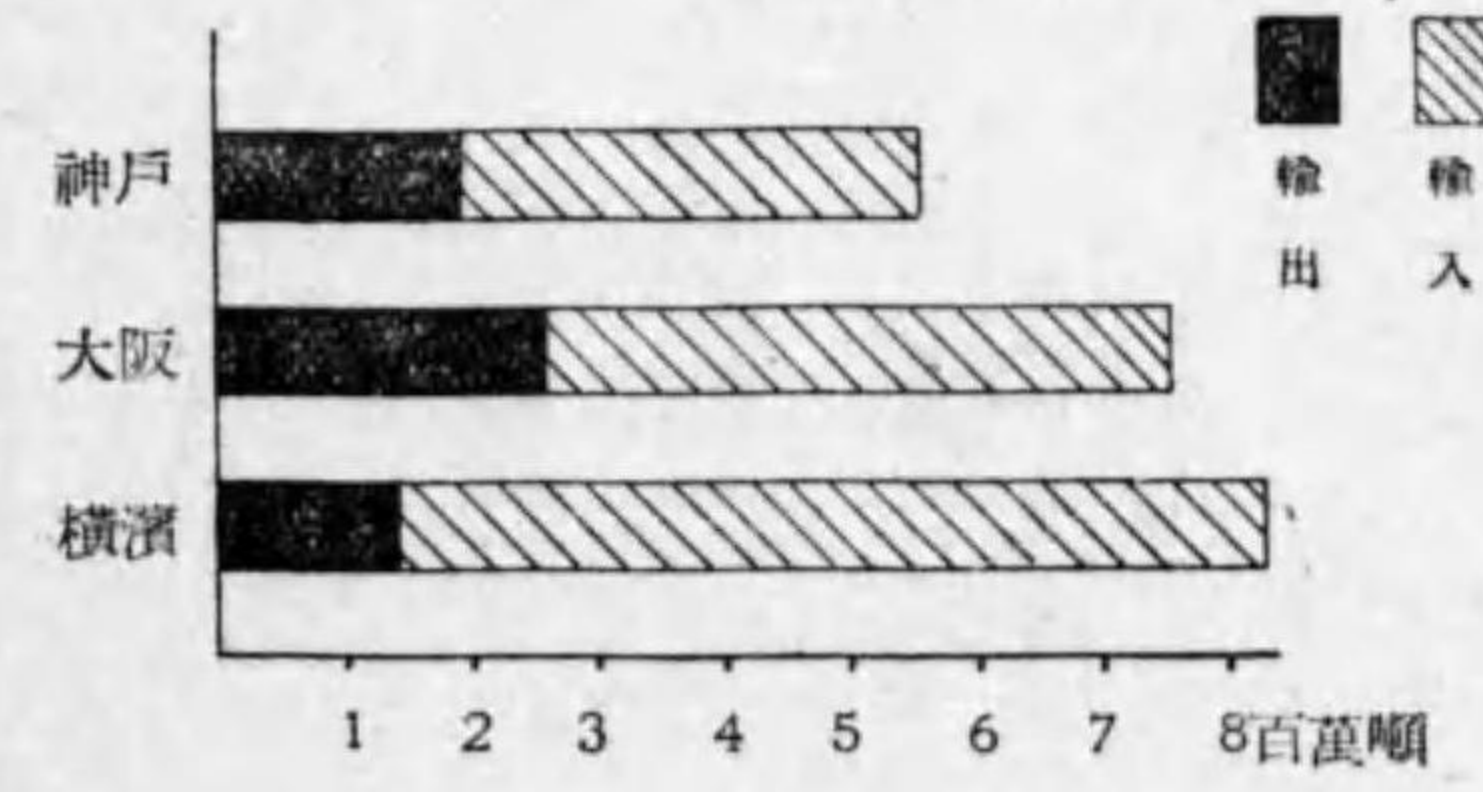
二、貿易額

昭和十四年の神戸港の貿易額は、十六億四千五百萬圓で、輸出が、九億五千九百萬圓、輸入が、六億八千六百萬圓となつて居る。同年の我國の貿易額は、六十四億九千四百萬圓であるから、神戸港はその二五%を占めて居り、横濱の十八億八千萬圓の二八%に次で第二位の傳統を堅持してゐるのであるが、第三位を占める大阪は、大正初期以來目醒しい躍進を遂げ現在では屢々神戸の地位を脅かしつゝあるのである。

殊に輸出に於ては最近第三國貿易の不振に乗じ從來主として滿關支及南方共榮圈諸國と取引してゐた關係上、斷然頭角を表はし全國第一位を占めるに至つたのである。

尙輸入額の第一位は、横濱の九億二千九百萬圓で全國の三二%であつて、神戸港は輸出、輸入及其の總額共に第二位である。では

第二十一圖 三港の輸出入數量 (昭和14年)

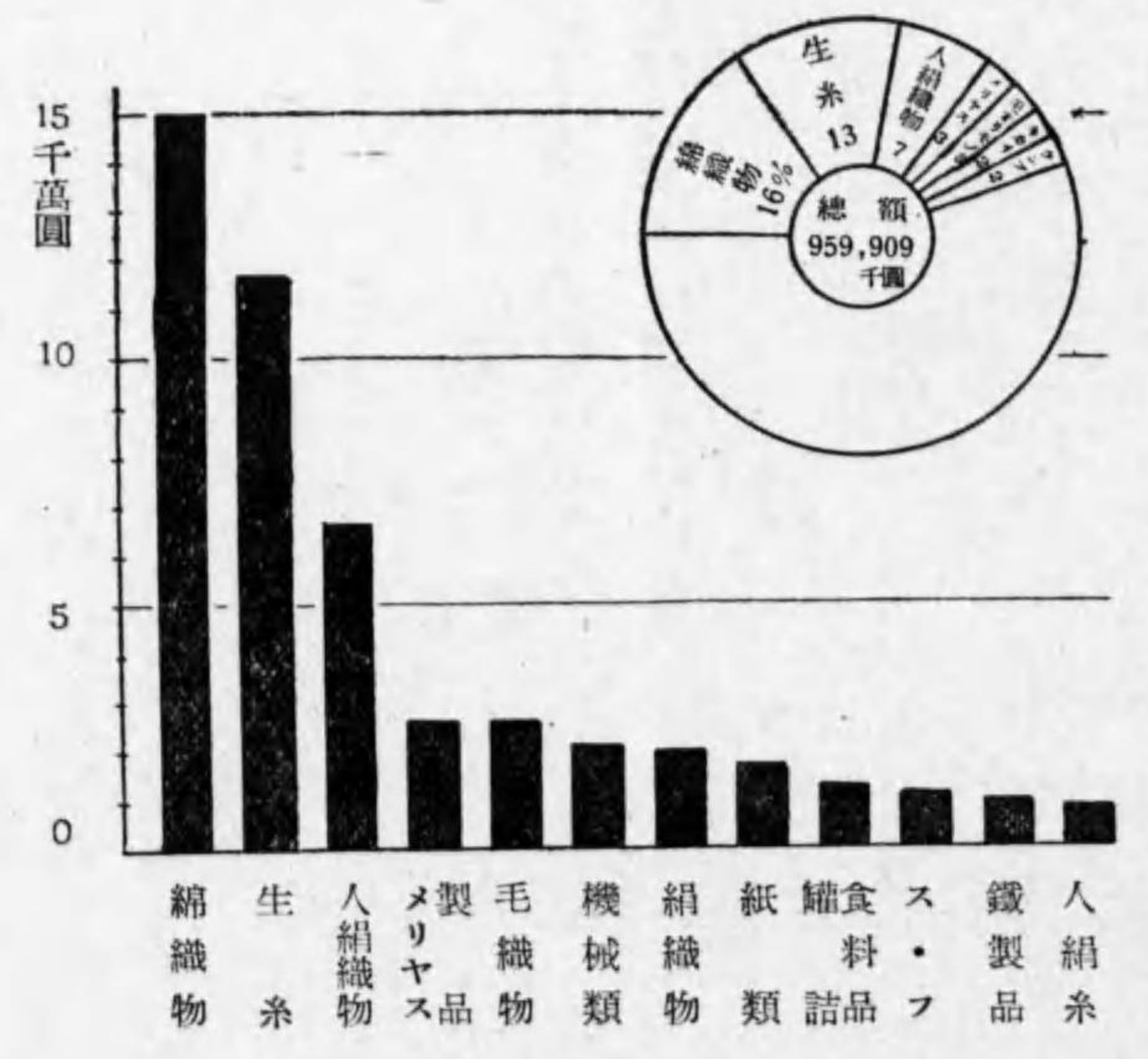


(イ)、何を如何程輸出してゐるかと言ふに、年額一千万圓以上のものは

綿織物	一四九、八二二千圓
生糸	一二〇、三三〇〇
人絹織物	六九、〇一〇〇
メリヤス製品	二五、七九九〇
毛織物	二五、六〇七〇
機械類	二一、九一四〇
絹織物	二一、一八九〇
紙類	一八、二六九〇
鐵製品	一〇、六九四〇
人造絹糸	一〇、〇二四〇
罐詰食品	一三、四六六〇
ステープル	一一、五一一〇
ファイバー	

で、此の十一品目でもつて全輸出額の

第二十二圖 神戸港の主要輸出品 (昭和14年)



五〇%を占めてゐる。

神戸港輸出品の第一位は、やはり日本輸出品の大宗を占める綿織物で、神戸港全輸出額の十六%を占めて居る。大阪港も同様綿織物を第一位として居り、其額は神戸よりは遙かに多く、二億一千萬圓で大阪港の輸出額の三一%は此の綿織物である。

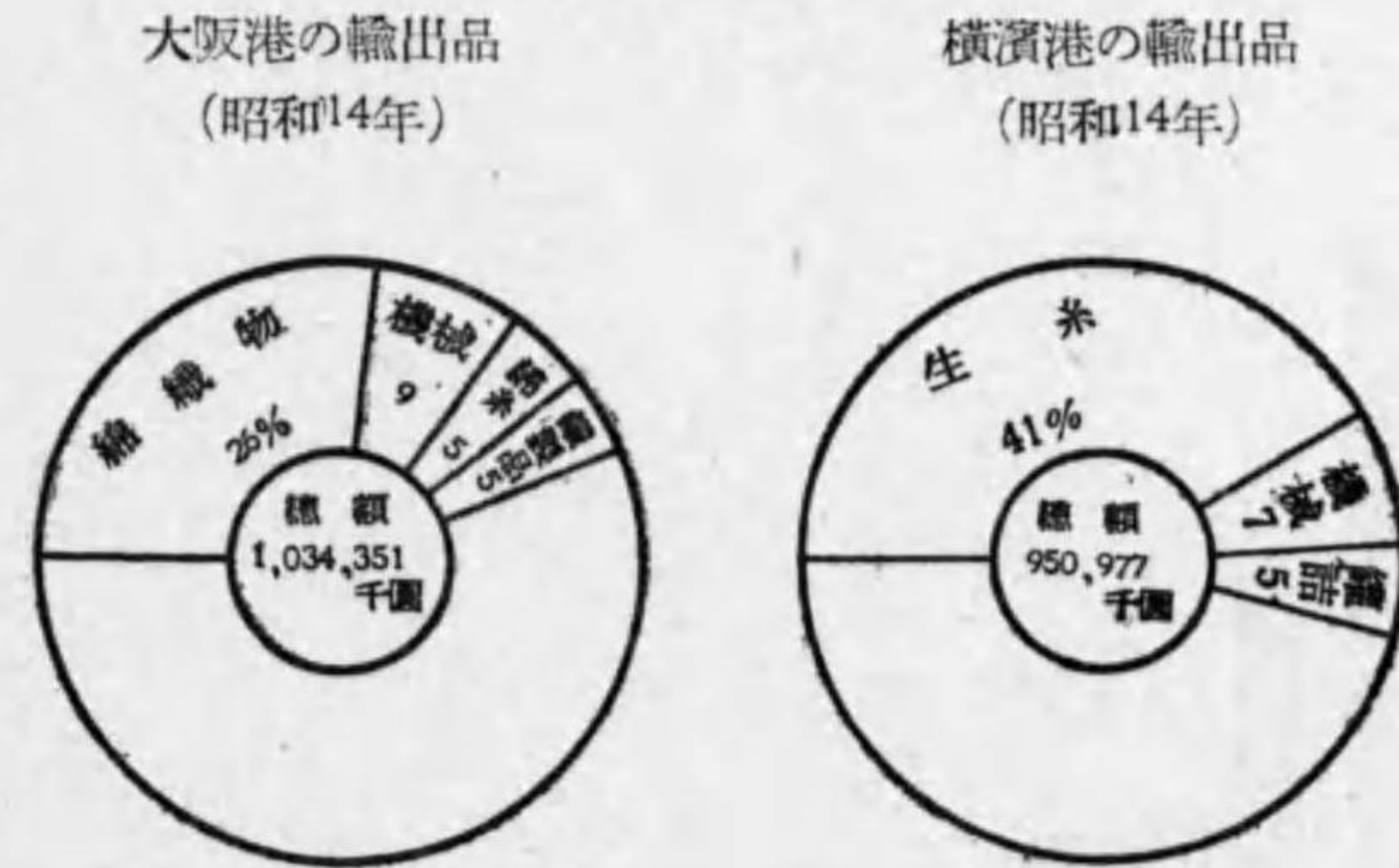
所が横濱は、神戸、大阪とは事情を異にし、輸出額の四一%までが生糸であつて、關西二港と著しい對照をなして居る。

尙日本の主要輸出品に就て、右三港の占むる夫々の分擔割合を見ると

綿織物に就いては、大阪五二%、神戸が四一%を輸出し、横濱は五%である。

生糸は、傳統的に横濱の専賣品で其の

第二十三圖



七六%を占め、神戸は二四%、大阪は輸出してゐない。輸出額第三位を占める。

機械類は大阪が第一位で四〇%、横濱が三一%を占め、神戸は一%に過ぎない。次は

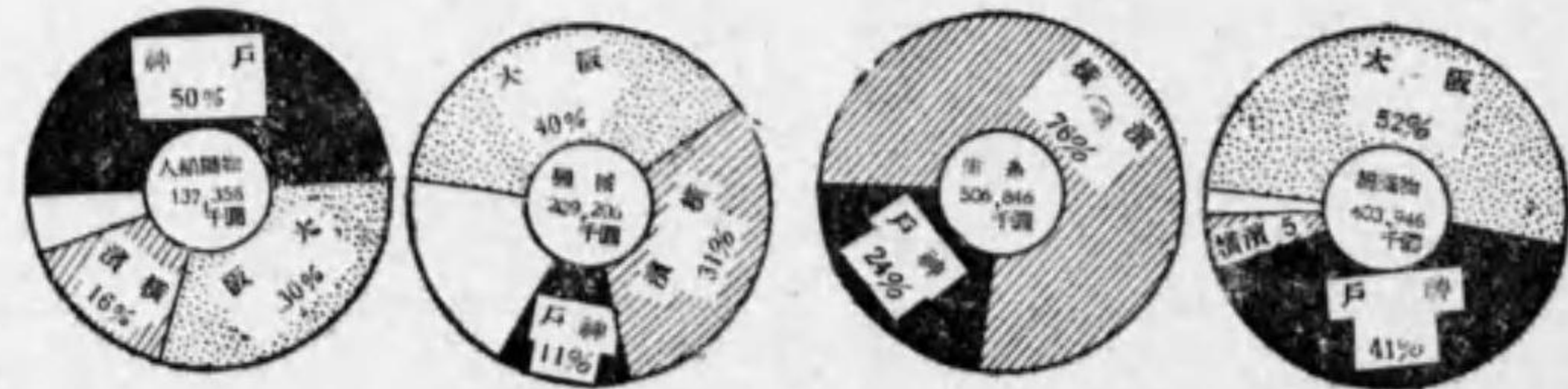
絹織物であるが、之は神戸港が第一位であつて、五〇%を占めて居り大阪が三〇%、横濱が一六%と言ふ割合になつて居る。次に

(口)、何を如何程輸入してゐるか、神戸港の輸入品の主なるものは

(昭和十四年)

棉	花	二五四、四二三千圓
パ	ル	四五、二六二〃
機	械	三六、六二六〃
油	糟	二五、三八二〃
豆	額	二四、九三〇〃
生	ゴ	二二、五五三〃
ム		

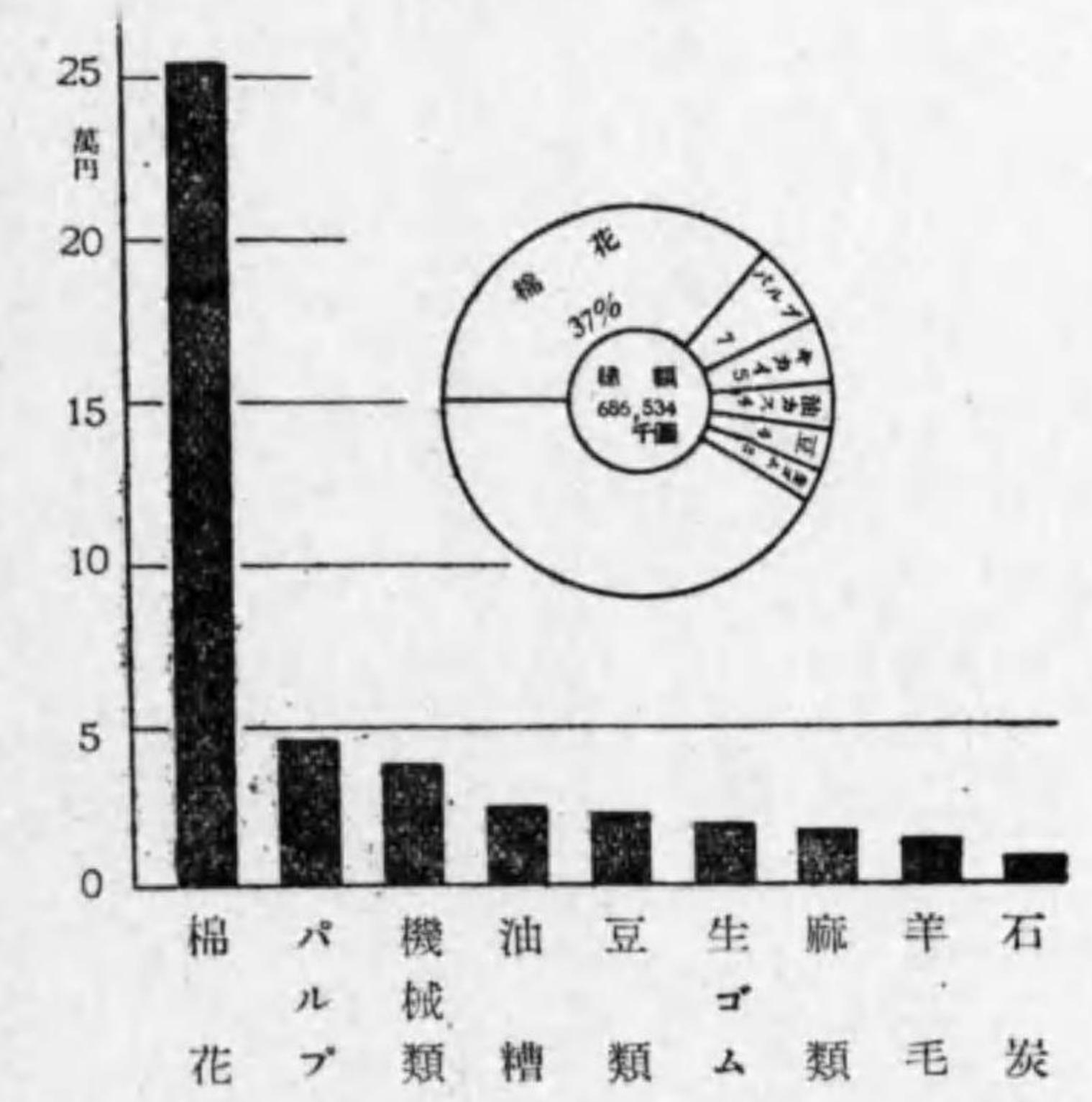
第二十四圖 本邦主要輸出品と三港



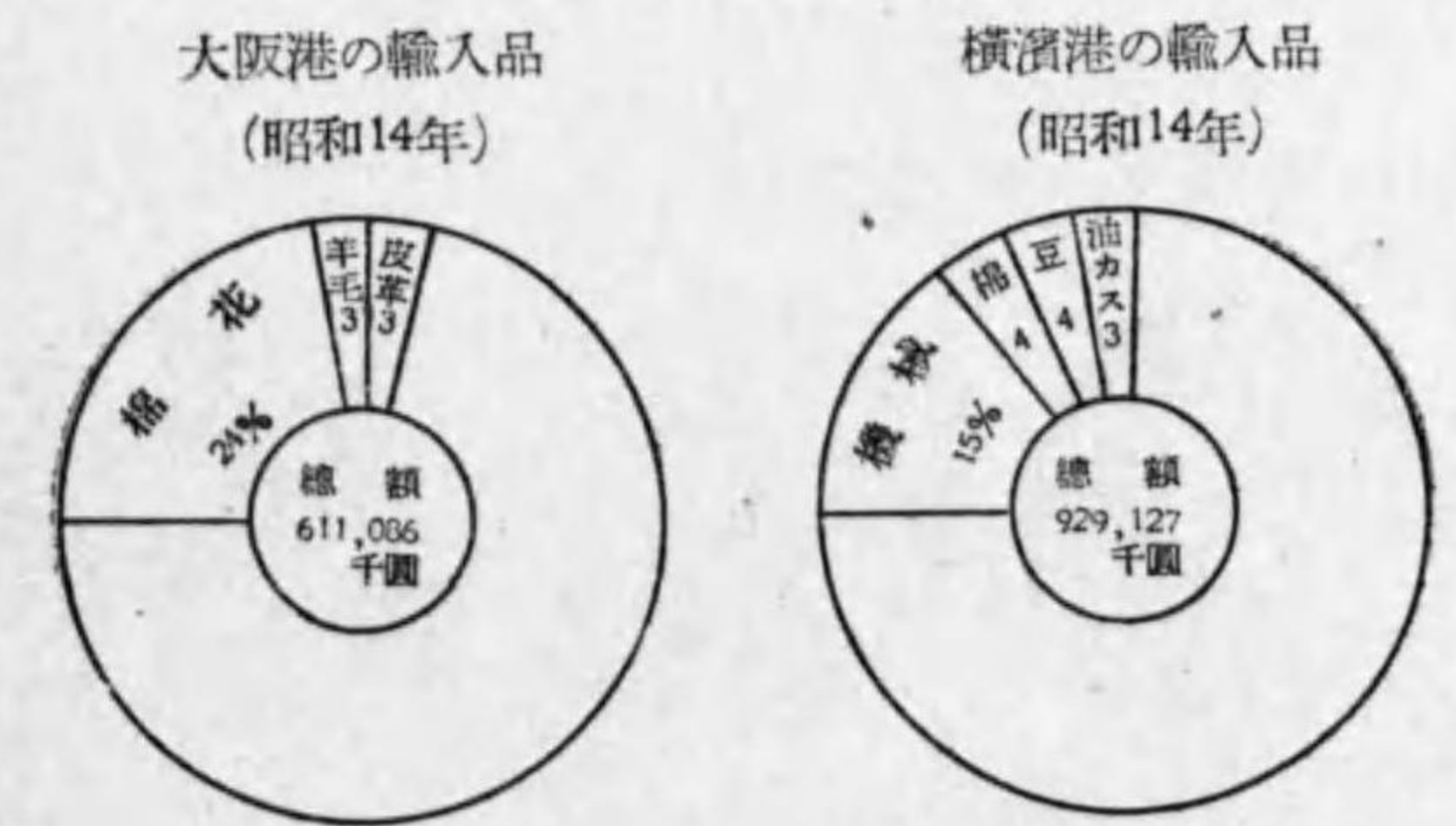
以上が全輸入額の六五%を占めてゐる。此の輸入品の構成に就ては大阪と神戸は比較的似て居るのであるが、横濱で

麻 一七、〇一二〃
 羊 一四、八九七〃
 石 七、二七三〃
 炭 毛 類

第二十五圖 神戸港の主要輸入品 (昭和14年)



第二十六圖



は輸入の第一位は、機械類であつて、之又輸出と同じく關西二港と其の構成を異にしてゐる。之尙の全國輸入額に對する割合を見るに、

棉花及繰綿は、さすがに神戸の古い老舗品だけに、全國の五五%を占めて居る。然し綿業地としては、神戸は大阪、名古屋に及ばないのであつて、従つて之等は神戸港より陸路或は海路を以て、之等の地方に積送されるのである。次に

機械類であるが、其の五七%までが横濱であつて神戸は一四%となつて居る。日本では機械類は開港以來常に重要輸入品の一になつて居るのであるが、少くとも、大正時代以前は、神戸が其の輸入の最高位を占めてゐたのである。然るに、今日では横濱が第一位、しかも過半を占めて居る。

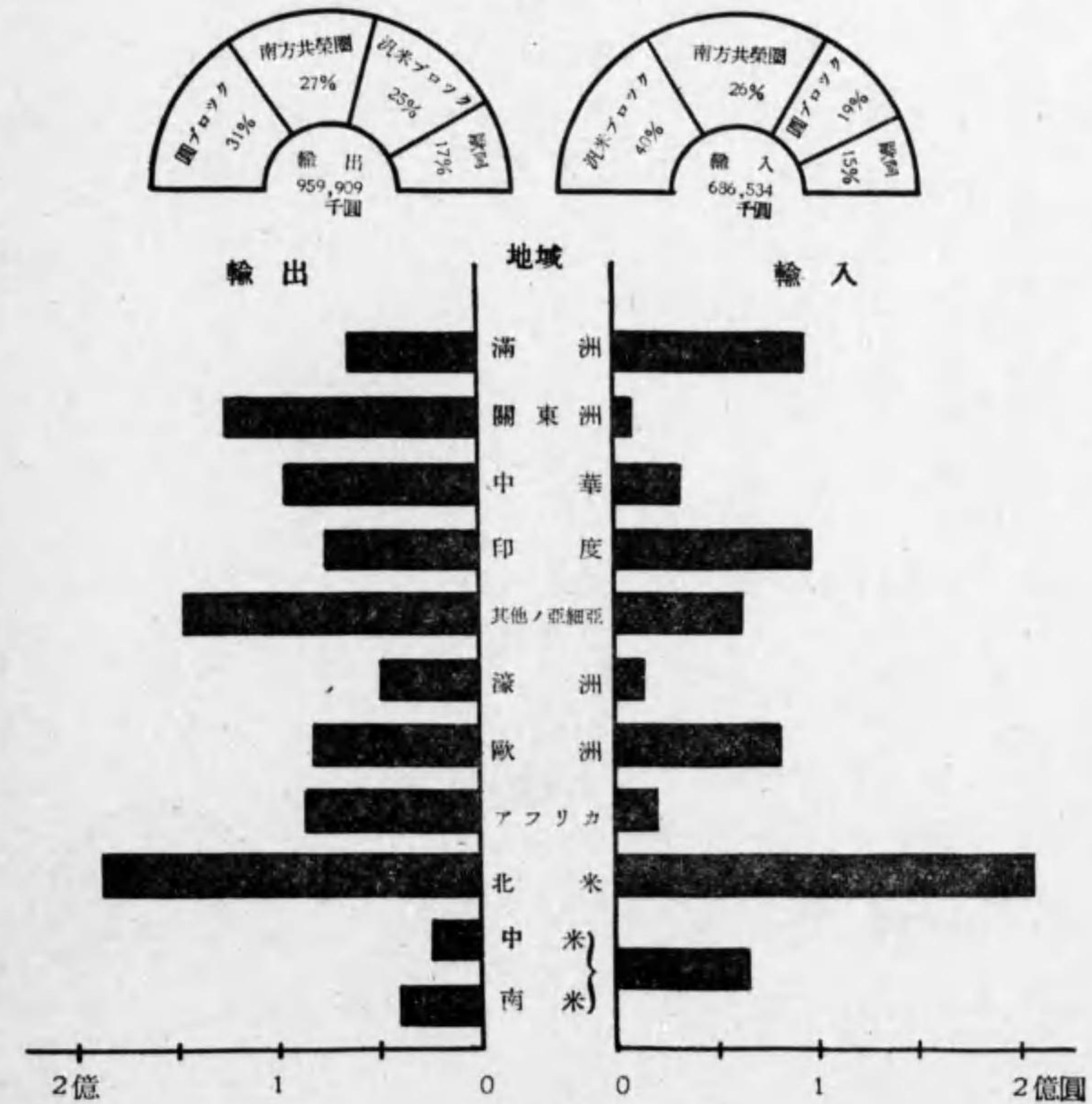
之は第一には輸入機械の種類の変遷即ち昔の紡績機械を中心とする輕工業用機械から高度の精密を要求する重工業用機械へと、其の

第二十七圖 本邦主要輸入品と三港 (和昭14年)



重點が移つてゐることを示すと共に、第二には、此の様な機械工業が東に、其の立地を求めてゐること、従つて、關西は輕工業、關東は機械工業と言ふ分業が出来つゝあると云ふ事情を物語るものと思はれる。尙又此の事は、明治、大阪時代輸入港と折紙を付けられた神戸港が、現

第二十八圖 神戸港の地域別輸出入額 (昭和14年)

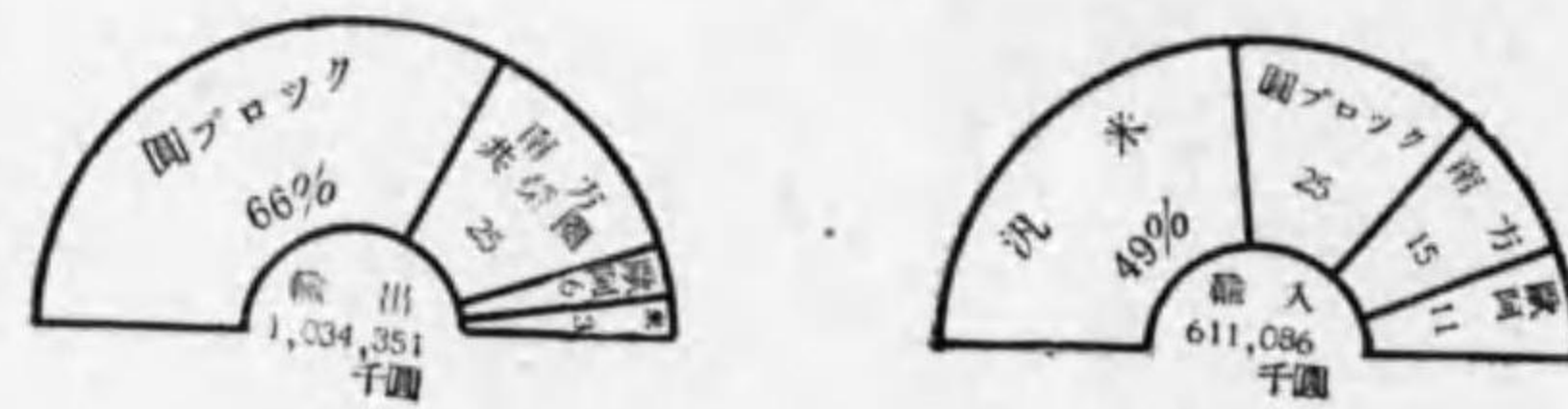


在では横濱に其席を譲り横濱が全國輸入額の第一位を占むるに至つた、と言ふ結果ともなつてゐるのである。次の

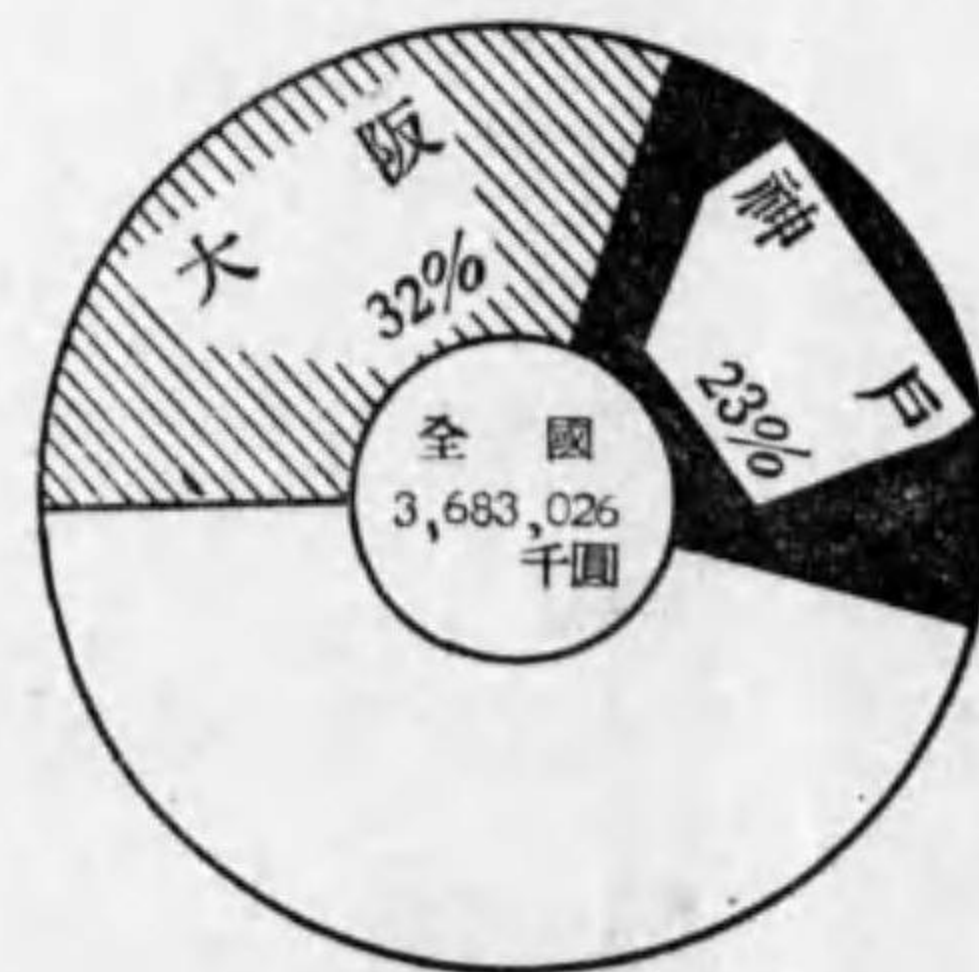
豆類と油槽は、最近の化學工業及代用纖維工業の發達に伴つて需要の増加したものであるが、之等は何れも横濱を第一位とし、神戸之に次ぎ、大阪は極めて少量である。

(ハ)、何處へ輸出し、何處から輸入してゐるか、假に世界を、現在造られつゝある經濟ブロックを參酌して、滿、關、支、を圓ブロック、英領印度其他の亞細亞諸國及濠洲を合せて之を南方共榮圏とし、歐洲と

第二十九圖 大阪港の地域別輸出入額



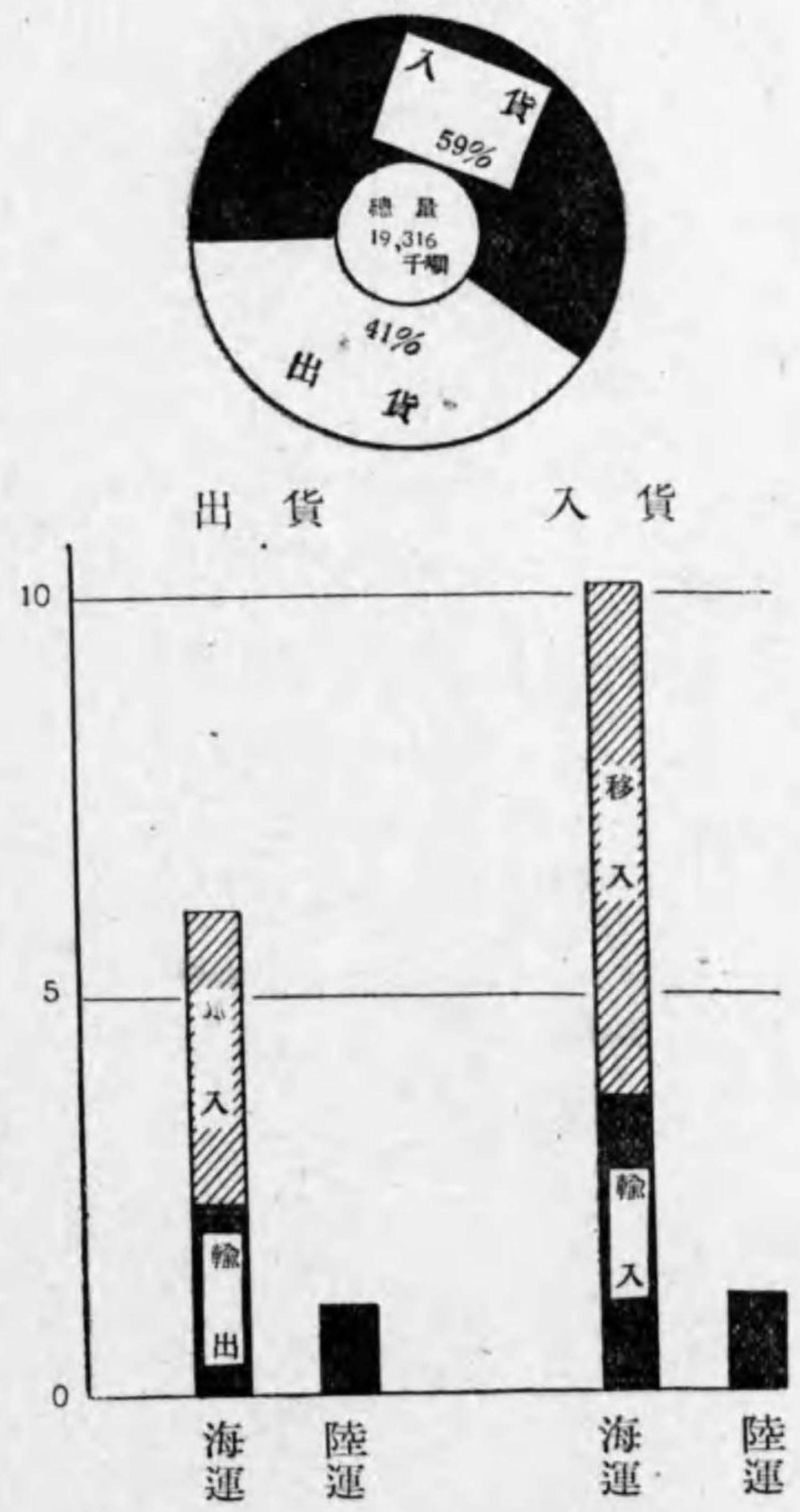
第三十圖 大東亞貿易と阪神港 (昭和14年)



アフリカを歐阿ブロック、南北米大陸を汎米ブロックと、此の四ブロックに大別して觀察すれば神戸港の輸出入額中最も大きいのは、圓ブロックであつて南方共榮圏が之に次いで居る。大阪でも其の六六%までが圓ブロックであつて、南方共榮圏が二五%となつてゐる。輸入に於ては、兩港共に汎米ブロックに重點があり神戸は四〇%、大阪では四九%である。尙本邦の對

圓ブロックと南方貿易之を假に大東亞貿易とすれば神戸は全國の二%、大阪は三二%を占めてゐる。

第三十一圖 神戸市の出入貨量 (昭和14年)



第三交 通

以上の如き、陸の工業と海の貿易の、此の二方面の經濟活動に伴つて、神戸市の交通機關は如何に活動してゐるか。

一、海 運

神戸港の貿易活動によつて吞吐される貨物量は、昭和十三年には、一六、九四九千噸で、一日平均四萬六千噸餘を動かしてゐるわけである。此の内譯を見ると

輸出 貨物	一、九三六、六〇八噸	一一%
輸入 貨物	三、五九二、五〇二噸	二一%
仲繼輸出入貨物	六七九、八八五噸	四%
移出 貨物	三、八六一、〇七六噸	二三%
移入 貨物	六、八七九、六二九噸	四一%

合計

一六、九四九、七〇〇〃 一〇〇〃

となつてゐる。

之等の貨物を運搬する爲、昭和十三年に入港した船舶は

外國航路	三、六〇三隻	二三、〇六一千噸	五五%
内國航路	二二、六七六〃	一九、二二四〃	四五%
合計	二六、二七九〃	四二、二八五〃	一〇〇〃

となつて居り、一日平均七二隻、一一萬六千噸が入港し、そして又出て行つたわけである。

尙大阪港の海運集散數量は(昭和十三年)

輸出入貨物	五、六六九千噸	一六%
移出入貨物	二三、九七四〃	八四〃
合計	二九、六四三〃	一〇〇〃

であつて、神戸の一七〇割となつて居る。然し此の輸出入貨物の内、輸出に於てはその一七%の三七〇、六〇七噸が、輸入に於ては六%の二一五、一六八噸が神戸港の仲繼によつてなされてゐるのである。

尙其の出入船舶は

外國航路	二、六八三隻	一三、六五九千噸	三四%
内國航路	一九六、八四六〃	二六、六六四〃	六六〃
合計	一九九、五二九〃	四〇、三二三〃	一〇〇〃

となつて居り、總噸數に於て神戸港に一步を譲つてゐるが、内國貿易に於ける絶對優位を示してゐる。

二、陸運

右の様な、港の活動に對して、陸の交通機關はどうか。本市の貨物取扱驛は十二であるが、其の取扱量の最も大きいのは、湊川、小野濱、兵庫、東灘等の順であつて、其の他は少量である。之等の十二貨物驛の一年間の集散貨物は

發送貨物	一、一八〇千噸
到着貨物	一、一八六〃
合計	二、三六六〃

であつて發着數量は殆ど相半してゐる。

尙大阪の陸運を見るに

發送貨物	七、七三三噸
到着貨物	六、五五一噸
合計	一四、二八四噸

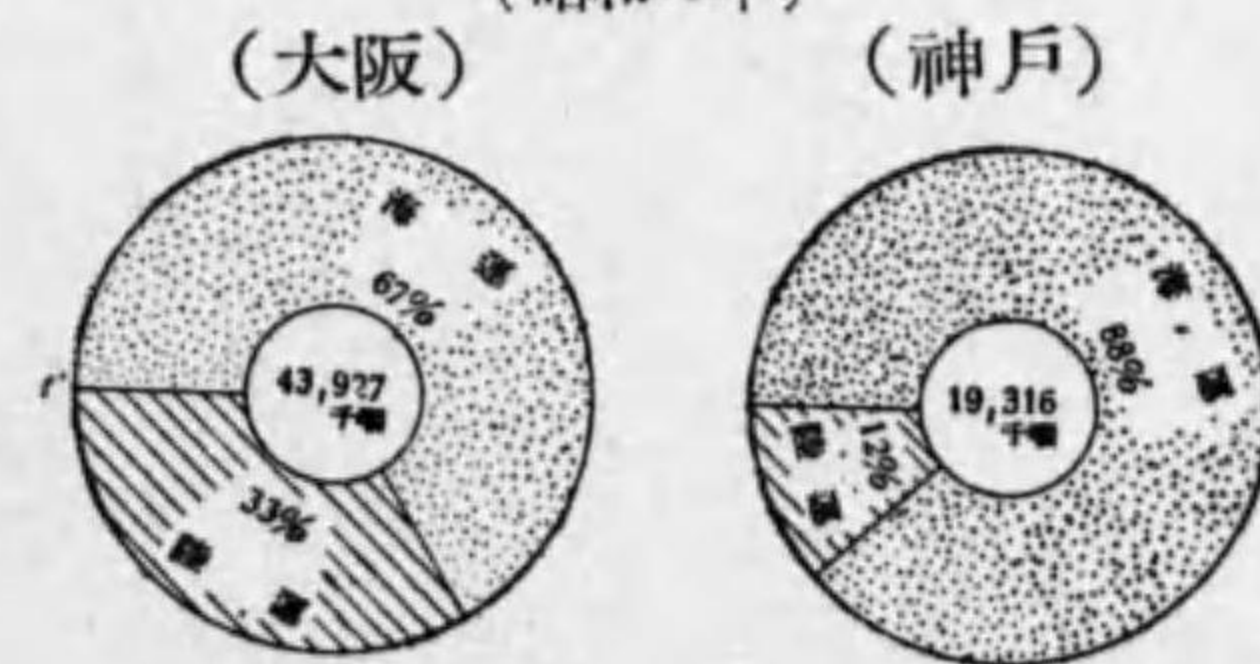
で、神戸の約六倍となつてゐる。

而して以上海陸を綜合するときは、

神戸	一九、三一六噸
大阪	四三、九二七噸

であつて、神戸の約二二七割である。之は大阪市の近畿鐵道網の中樞に位して海陸連接の便大なるに由來するもので此の事が、小型船舶を以てする内國移出入貨物を大阪港に集中せしめる結果に外ならない。即ち神戸港の内外貿易貨物一〇、七四〇千噸に對し、大阪港のそれは二三、九七四噸、後二倍半に達して居るのである。尙海陸集散貨物の

第三十二圖
入出貨物量海陸構成比較
(昭和13年)



割合を見るも、神戸は陸運一〇〇に對して、海運七一六であるが、大阪は、陸運一〇〇に對し海運二〇七となつてゐるのである。

結 び

六甲山系の狭い斜面の上に、港が築き上げた産業神戸の全貌は、概略以上の如くであるが、今日のそれは、大東亞戰の赫々たる戰果と共に又新しき時代の黎明に立つてゐることに氣づくのである。

既に其の緒に着いてゐる滿支開發の進展と日滿支を中核とし、ハウス・ホーファーをして、此の地域を制覇するものは世界を制覇すると言はしめた南方諸洲を包容する大東亞廣域經濟の確立が、吾が神戸港に何を要求してゐるか。大東亞交易を賄ふべく我國の保有すべき船舶は、千五百萬乃至二千萬噸と言はれてゐる。之を戰前の我が保有船舶五百六十萬噸に比ぶれば三倍乃至四倍である。此の何%かは南方諸地域相互の交易に就くとしても、猶二倍乃至三倍の船舶量に應ずるだけの港灣設備を整へることは、今日のさし迫つた問題である。殊に背に山を廻らして北風に對し、波靜かにして水深く、港底の土質亦築港技術上絶好の條件を具ふる神戸港の如きは、本邦の

他の何處にも求め得ないと言ふことに思ひを致すならば、此の問題は、吾々港都市民の新なる關心事と言はねばならぬ。

更に思を轉ずるに、無限の資源と東亞十億の民族を擁して立つ明日の東亞の工業の、その如何なる部分を吾が本土が受持つにもせよ、新なる條件の上に展開さるべきそれが、何處にその立地を求むるかと言ふことである。元來、資材と製品市場を共に海外に求むる我が國工業の立地は、港灣を無視しては規定し得ない。今地圖を展いて、今日の話題、國土計畫上の工業分散と言ふことをも顧慮して之を考ふるに、北方中國の連峯を背にし、南面四國を抱いて大洋に備へ、東方又急峻紀伊の防砦を繞らし、關門を以て西の防りとする此の内海瀬戸の沿岸と之を包む丘陵と原野の廣表は明日の我が本土工業に残された唯一の適地であると斷することは果して我田引水に過ぐるであらうか。而して此の様な明日の内海工業の哺育ルートは、内海諸津の自然的條件よりして一に神戸港の天恵に俟たねばならないことは言ふまでもない。

以上の諸點を綜合するならば、既に年々六―七百萬噸の能力超過貨物を負荷されつゝある神戸港の、今日劃期的な大築港計畫が、時の課題として採り上げられつゝあることは、蓋し宜なりと言はねばならぬ。

然し吾々は、叙上の如き、神戸港の明日の輝やかしきに思ひ耽るのみではなく、今日、更に心せねばならぬことは、顧みて昨日のそれが、此の狭い地域に港都産業の絢華を咲かせたとき市民に何を齎らしたかと言ふことである。海濱に、工場の煙突が日毎に増えて行くとき、田畑の影は日毎に消え、或は川を埋めて方寸の空地をも残さざらんと街の縁を奪ひ去つて、一方糞三萬に垂んとする超過密人口をそこに押し込め、乳幼児死亡率世界一の汚名を如何ともし得なかつた嘗ての神戸を吾々は忘れてはならないのである。既に六甲山系の南斜面を埋め盡した港都工業は、事變以來其の餘力を東西の平原に伸しつゝある今日、前述の如き大東亞經濟に有つ神戸港の輝かしき明日の姿を描くとき吾々は同時にその傘下に培はるべき工業と、そこに集まる人口を擁して現出すべき都市を如何に構築し、如何に經營するかの配慮を斷じて怠つてはならないのである。

吾々は今、新時代の曙に立つて、明日の輝かしい港都の建設を想望すると共に港に連なる東西の野が、十九世紀の都市が吾々に遺したと同様の禍根を、再び明日の市民に遺さざらんことを祈念しつゝ、此の小篇の筆を擱く。

業産叢書刊行案内

- 第一輯 有限会社と其の設立手續 (品切)
- 第二輯 有限会社は如何なる方面に利用されてゐるか (品切)
- 第三輯 神戸市に於ける中小工業者の現状と轉失業問題に對する意見 (品切)
- 第四輯 第七十六議會要法律要綱
- 第五輯 簡易にして合理的な商店帳簿の附け方
- 第六輯 戰時體制に入らんとする米國最近の財政金融問題 (品切)
- 第七輯 經濟關係法規索引 (1) (自昭和十六年四月一日 至昭和十六年五月十五日)
- 第八輯 經濟關係法規索引 (2) (自昭和十六年五月十六日 至昭和十六年八月卅一日)
- 第九輯 中小商工業金融問題の再認識
- 第十輯 第七十七臨時議會議決法律の解説
- 第十一輯 神戸市の住宅事情と戰時下の住宅問題
- 第十二輯 時局下に於ける中小商業者の動向と轉廢業問題に關する一考察 (品切)

- 第十三輯 戰時下に於ける犯罪と刑罰に就て (品切)
- 第十四輯 神戸市に於ける企業合同の趨勢
- 第十五輯 食糧配給政策の回顧と神戸市の現状
- 第十六輯 經濟關係法規索引 (3) (自昭和十六年九月一日 至昭和十七年二月二十八日)
- 第十七輯 第七十九議會議決法律概要 (附・第七十八及第八十臨時議會議決法律ノ概説) (品切)
- 第十八輯 商業組合は何處に向ひつゝあるか―神戸市に於ける實情調査から得た一示唆―
- 第十九輯 貿易旋風裡に立つ貿易組合
- 第二十輯 經濟關係法規索引 (4) (自昭和十七年三月一日 至昭和十七年八月三十一日)
- 第二十一輯 工業組合は何處に向ひつゝあるか

967

192

昭和十八年四月十日印刷
昭和十八年四月十五日發行

編輯兼發行人 植竹重雄

發行所 神戸市湊東區橋通一丁目
神戸市調査室
電話元町④一八一番

印刷者 大阪市南區順慶町二丁目二二
中村繁次郎

印刷所 大阪市南區順慶町二丁目二二
共同印刷株式會社大阪營業所

(西大2381)

967

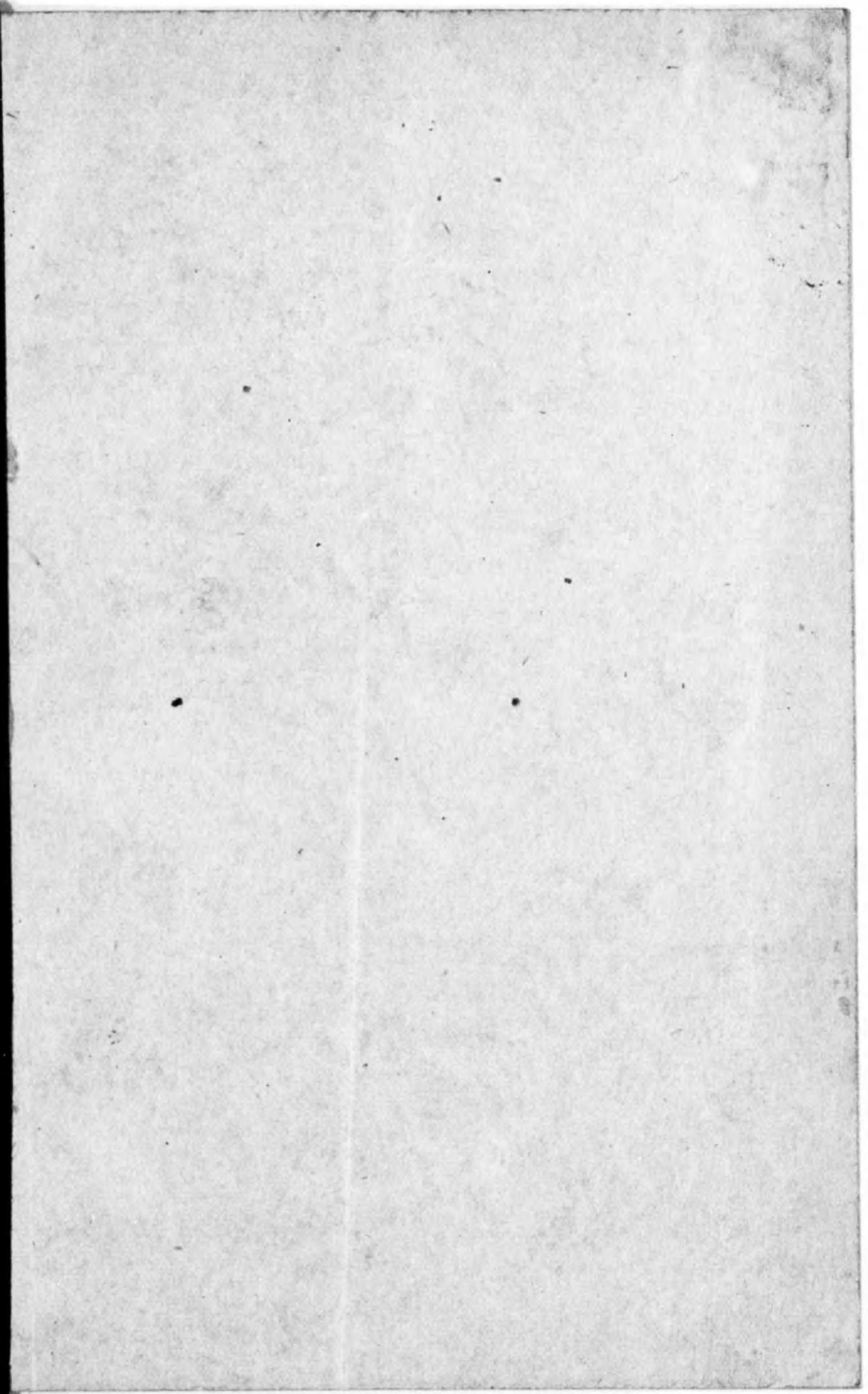
192

製糖部控

日	月	年	號	冊
			967	1
調査資料 / 糖業 部 / 糖業部建設				
氏名				

(109Y51)

967
192



終